

地を這う天馬ペガサス：マリアン・ムーア

—— その『完全詩集』を完訳する ——

森 田 孟

マリアン・ムーア (Marianne Moore, 1887-1972) は、生涯に189篇¹の詩作品を公刊したが、そのうちの125篇を『完全詩集』² (CP) に収録した。その中から、まず、初出の順に従って以下、17篇を訳出してみよう。

“Keeping Their World Large” 「彼らの世界を大きく保ちながら」

アマリニモ文字ドオリニ、彼ラノ肉体ト彼ラノ精神ハ我ラの盾デアル。

「ニューヨーク・タイムズ」1944年6月7日

私は見たい その国のタイルを 寝室を
石のテラスを

そして古来の井戸を、リナルド
カラモニカのは靴直しのだ、フランク・スプレンドリオのと
ドミニック・アンジェラストロの国——
食料品屋の、氷屋の、舞踏手の——あの
美しいダミアノ嬢の、叡知の

そしてあらゆる天使たちのイタリア、このクリスマスの日
このクリスマスOfYear。

騒音を立てないピアノ、
無邪気な戦争、己が意に反して行動できる心。ここでは
各々が似ていなくて全てが似ていて、出来そうだ
非常に多くが——よろけながら、倒れながら、増やされて
遂に身体は 踏み歩く地面のように横たわった——

「もしキリストと使徒が無駄死にしたのなら
私は彼らと共に無駄死にしよう」

こういう勝利のやり方に反抗して。
あの白い十字架の並ぶ森！⁽¹⁾
私の眼はそれに対して閉じたりはしない。

全ては 生け贄に捧げられる動物のように並べられていて——
山上のイサク⁽²⁾のように
自分たち自身のための生け贄だった。

死への行進なのか、生への行進なのか？
「彼らの世界を大きく保ちながら」
その精神とその肉体は
あまりにも文字どおりに我らの盾だったので、
依然として我らの盾なのだ。

彼らは敵と闘った、
我らは豊富な生活と自己憐愍と闘うのだ。
輝け、おお 輝け、
期待を裏切ることなき太陽よ、この病める状景の上に。

— Contemporary Poetry, 4 (Autumn 1944), 5 - 6

[自注] ジェイムズ・ゴードン・ギルキー師 (Reverend James Gordon Gilkey) とこの詩の標題の下にある引用の出所 [が記されている]。

訳注 (1) 戦士の墓地を指す。

(2) 創世記 21: 1-4 参照。

第二次大戦中の作品で、「我々の盾」となって死んでいった兵士への思いと、イタリアの再生への希いが表明されているだろう。戦争と過ちの支配する「病める」世界での人々の最上の防禦は、謙虚に誇りを犠牲にすることだと示唆するのがこの詩だと、エンゲルは言う (E.111)。作中の人名はムーアのイタリア系の隣人たちであろうし、彼女は、芸術と工芸、叡智と天使のイタリアを見たいと希う (E.112)。太陽はムーアには、再生の象徴であり (E.113)、クリ

スマスは、キリストの犠牲と贖罪へ思いを到す時である (E.113)。

His Shield 彼の盾

ピン・スウィン あるいは ^{スバイン・スウィン} 棘猪 は
 (ハリネズミと誤り呼ばれたあの ^{スバイン} 刃豚 だが) その刃を全て外に出し
 ハリモグラと棘皮動物は着古して加工した
 ピンの座布団状の毛皮の上着をまとい、棘の生えた豚かヤマアラシ、
 角付き鼻面のサイ——
 全ては戦闘服に身を包んでいる。

豚の毛皮では間に合わない、私は包もう
 私自らを長老ジョンのように火蜥蜴の皮膚で。
 炎の真中の蜥蜴、火の付いた燃え木
 それは生命で、石綿の眼 石綿の耳をし、入れ墨された羽毛と
 恒久不変の豚皮を
 足の甲につけて、彼は耐えられるのだ

火に そして濡れることもない。
 華麗な趣味を持つ征服し難い彼の国では
 黄金があまりにもありふれていて誰もそれに注目しなかった。強欲と
 追従とは知られていなかった。テニス・ボール大のルビーが
 流れに連合して
 山は出血しているように見えたけれど、

消滅させられることのない
 火蜥蜴は 唯 長老とだけ呼称した。彼の盾は
 彼の謙遜だった。カルパシアの
 亜麻布の上着を着て、彼の一家のライオンの子供と黒貂の従者に
 両側を防禦されて、彼は明白にしたのだ
 武具師のよりも安全な

方策を、保持しようとするものを

放棄する力を。それが自由なのだ。成るがいい 恐龍の
 頭蓋骨状に、細い管状に巻くか火蜥蜴の柔毛を備えた状態に、ヤマアラシの
 鋼鉄の大隊よりもっと金具を付け、槍の衣服をつけるがよい、だが 鈍く
 あってほしい、羨しがられたり
 計量棒で武装させられたりはしたもうな。

— *Title*, Bryn Mawr College (November 1944), 4.

存在の全体性を保持するには如何なる種類の鎧が役立つか、それは謙虚だ、と主張するのがこの詩 (E.110) で、「プレスター・ジョン」(Prester John) と通称され、中央アジア、後にエジプトを支配したとされる中世の伝説上のキリスト教修道君主「長老ジョン」(Presbyter John) を扱う。彼には旅の説話があるが、火蜥蜴 (salamander) の皮の衣服を着ていたと信じられている。それが、火蜥蜴が火中でも無傷で生き延びられるという伝説上の能力と、それに関連して、火蜥蜴の皮膚が石綿で出来ているという言い伝えに言及する理由である (E.111)。全てが戦闘服に包まれている例として「ヤマアラシ」(porcupine) を出すが、porcus=spine, spina=spine というこの名称のラテン語の語源へと言及しながら入念な地口、語呂合わせをしてみせる。時々「ヤマアラシ」と間違えられる「ハリネズミ」(hedgehog) や「ハリモグラ」(echidna) にも言及する。法王や司教などは望まず長老でよしとした「プレスター・ジョン」にとって「彼の盾」は、あくまでも謙虚、謙遜 (humility) であるとして、この苦難の世を生き延びるのに、羨しがられたり、富や地位を他人のそれらと比較して妬みを買うような「計量棒」(measuring-rod) を備えたりはしない生き方を唱道した (E.111) ものである。動物を持ち出すと俄然、一段と生彩を放つのはムーアの常である。abcabc と各連が綺麗に押韻するが第五連のみが abcdabc と、変化をつけられている。

The Icosasphere 二十球面

「バッキングムシャー⁽¹⁾の生け垣には
 小鳥が 混ざり合った緑の繁茂の中に巣くって
 細々と編み上げている 紐や蛾や羽毛やアザミの冠毛を
 拋物線状同心円の曲線に」^①そして
 窪みをこしらえて 稀なる効能を持つ球面の偉業を残す、

それなのに一方では 調和の取れた行動がとれなくて

誰かの財産^②をむやみに欲しがって

三人が殺され 十人は偽証をし、

六人は死に、二人は互い同士殺し合い、そして二人は 犯した危険のせい
で罰金を支払った。

しかしそれから二十球面が現われ

その中で遂に私たちは 節約の頂点で 鋼鉄裁断をするのだ

三角形二十箇が連合して 包むことが出来るからだ 一つの

球か 二重に丸みのある貝殻を

殆ど無駄がなく 非常に幾何学に適った

整い方で それは二十面体になるのだ。それを作っている技師たち

か J.O.ジャックソンなら 私たちに教えてくれるだろうか

どのようにしてエジプト人が78フィートの真物の大理石を垂直に組み立てら
れたのかを

私たちは知りたいものだ どのようにしてそれが成されたのかを。

— *Imagi*, 5, No.5 (1950), 2.

[自注] メロン研究所は、J.O.Jackson の発明になる意匠の鋼鉄の球体に責任がある。それは「長らく製図家や技師を困惑させてきた問題を解決するものである。ゴムボールを、皺を寄せたり無駄を出したりせずに包みたいと試みてきた人なら誰にも…この問題の本質が分るであろう。鋼鉄は包装紙同様に長方形で…鋳型から打ち出される。ジャックソン氏が発見したのは、プレキシガラス⁽²⁾は鋼鉄と同じ可塑流動性をもっており…適温に加熱されると、元の正確な形にぐねぐねと戻るであろう。それで彼は、プレキシガラスの平板から四インチの球体を形作り、その型を吟味して一つの意匠を作り出すが、それによって二十箇の正三角形——等辺形で幾何学上可能な最多数——が五箇の平行四辺形にされて、無視して差し支えない程の切り屑の無駄しか出さずに長方形の板から切り出せるのである」。ウォルデマール・キムフェルト (Waldemar Kaemffert) : 「鋼鉄使用の節約」 *New York Times*, February 5, 1950.

① マックナイト・コーファ (Mcknight Kauffer) の言。

② Mrs.Henrietta Edwardina Schaefer Garrett なる人物の三千万ドルの

遺産で、彼女は子供のいないまま遺言書も残さず1930年に亡くなった。「フィラデルフィアの孤児裁判所は、その財産を請求する25,990人以上もの人々を再吟味した。3人が争いで殺害されたと報道された。10人が偽証で投獄された…。12,3人以上が罰金刑に処せられ、6人が死亡し、2人が自殺した」。New York Times, December 15, 1949.

訳注 (1) Buckinghamshire. イングランド中南部の州。

(2) Plexiglass. メタクリル酸メチルの可塑性重合体。透明度が高く、軽く、耐候性に優れ加熱によって自在な形に加工出来て、標識、窓、家具などに使われる。

無意識のうちに数学上の離れ業をやったのける自然の妙と、技師が二十面体を研究して鋼鉄の節約使用を工案したことを対比し、他方、人間の浅ましい欲望を嘆く。技術や技芸に殊の他深い関心を示し、人間の生き方を探求したムーアの面目躍如たる作品であろう。第二連の題材を持ち込んだ飛躍ぶりに注目したい。倫理を考察するための扉を開く鍵としてムーアは主題を使うのであり、欲望と行動との統合がなされている (E. 110)。

三連とも2行目と5行目が押韻し、第二、第三連は3行目と6行目も押韻する。先き程の「彼の盾」の「詩行の棘立った韻律は、ちくちく尖った主題と調和するように目論まれている」(E. 111)にしても、そのような韻律の実態は押韻の姿同様、翻訳では殆ど全て消失してしまうのが残念である。

Then The Ermine それではオコジヨは

「斑^{まだら}というよりむしろ死んでいる①」、だからそれを信じよう

考えない理由があるにも拘らず、
私は昼日なかコウモリを一匹見た、
信じ難い

けれど 私には自分が正しいのだと分った。それで私はうっとりした——
サクラ草のように
揺れながらだが、それは私の周囲でくねり動いている
確信なさそうに。

ハンマーの手をした空威張り代りに
 戦略を用いれば選ぶことが出来たであろう
 次の標語②で趨勢を
 <私は軽蔑する 変えることや

恐れることを>——私は変らない、びくびくしない、
 どのような根拠に基づけば 人は
 言えるのだろうか 私が脅えるのは困難だと。
 何も確かなものはない。

しくじればよい、そうすればラヴァター③の自然地理学には
 もう一人曖昧に見せる技能を
 讃える人が現われるのだ——
 今や斬新なのだ。

だから ブラジルシタン⁽¹⁾の肘掛け肩付き長椅子にそれを表現させてみよう
 「黒檀スマイレ色」と、
 正装した主人コルボと
 女羊飼い、

元気づけるしわがれたカラスの鳴き声
 あるいは 親密さを備えた威厳。
 阻止された爆発性はしかし
 一種の予言者であり

完成者であり、だから身を隠す人で——
 内部で破裂する力を持ち
 デューラーの描くスマイレ色のようで
 更に一層黒くさえみえる。

—— *Poetry*, 81 (October 1952), 55-6.

[自注] ① クリトフォン (Clitophon) : 「彼の工案したのはエルミオンで、
 斑というよりむしろ死んでいると知らせられる話す能力を備えていた」。シド

ニー作『アーケイディア』巻I, 第17章4節。ケンブリッジ古典叢書第I巻, 1912. Albert Feuillerat 編。

② ボーフォール公爵アンリー (Henry, Duke of Beaufort) の標語。Mutare vel timere sperno.

③ John Kaspar Lavater (1741-1801). 自然地理学の学者。彼の体系には、形態学、人類学、解剖学、歴史学、及び、図式の研究が含まれている。クルト・セリグマン (Kurt Seligmann) 著『魔術の鏡』*The Mirror of Magic* (New York: Pantheon Books, 1948. p. 332).

訳注 (1) palisandre (=Brazilian rosewood). ブラジル原産のマメ科の木。赤色に黒い筋がある堅い材。

クリトフォンは、アーケイディアの王バシリアスの娘とカランダールとの間の息子で、彼は金箔で蔽われている鎧を着、その紋章はオコジョ (俗に白貂) で、「汚点よりは死を」との言葉が添えてあった。この詩は、標題と第一行とで、この、Sir Philip Sidney (1554-86) のロマンス *Arcadia* (1590) の登場人物の理想主義に言及している。事実や真実を、圧力に屈して変えるようなことはしないし、恐れもしないと表明しており、真実を伝えること (truthfulness) が主題であろう (E. 133)。ラヴァターはスイスの詩人・牧師で、人相学・観相術 (physiognomy) の研究が最もよく知られていた (E. 134)。観相術と、自然及び自然物の記述である自然地理学 (physiography) とは共にムーアの関心事であったから、自分の、コウモリを日中見たという提示が信用されないなら、それだけ尚更一層強く、ラヴァターが示した技能を自分は讃えることになるのだと、ムーアは述べているように見える、とエンゲルは言う (E. 134)。ラヴァターの、曖昧なものを明晰にする能力は「今や斬新」なのだから。秘められた可能性には、デューラー [Albrecht Dürer, 1471-1528] に描かれたスマレのように内部破壊力があると作者は讃え、スマレが真実への愛を表わすという色彩の象徴も示す (E. 134)。象徴といえはオコジョ (白貂) には、高貴、正義、純潔、などの意が古くから籠められている。「コルボ」(Corbo) は、“Corbeau” (フランス語、「カラス」) であろう。以下、連想が続く。

全八連のうち五連は、第1, 3, 4行が押韻し、あとは、第1, 4行、第1, 2/3, 4行、第3, 4行の押韻という具合に変化がある。

ヨッパから船出したヨナ⁽¹⁾を見よ、鯨に
妨げられたのだ、何ものも引き留められなかった政治家を支持するのは困難だ、
尤も改悛するぐらいなら死ぬ方がましなどとは思わない人がいるが。

危機に際しては決して誤ることなかれ、というのは君の全身は衰えて
模範としてスペインの生徒を選ぶだろうから
彼は六歳で、蝸牛のために立ち止まった
ラバと騎手^①を 描いた。

「壮麗は覆い隠されている、ヴィクトル・ユゴーが
言ったように^②」。<熱烈に感じる^③>、 そのとおりだ、感情に惹き付けられて。

トム・フルは「努力し、しかも他のものより
しばしばそうする」——世に知られたのは四月一日、曖昧な意味で
或る重要な日——あの微笑んでいる
名匠アトキンソン^④の逸品は 優勝者のあの印をつけて更に余分に
必要とあれば力走する。そうだ、そうだ。「機会は

残念な不純物だ^⑤」、トム・フルの
白い左の後足のように——不整合だ、尤も結果で
判断すると、彼に自信を与える一種のワタラウサギ⁽²⁾ だが。
望楼に登って速度を比較しながら フレッド・カポセラは冷静を失わな
い。
「そいつはしたたかだよ」と彼は言った、「だが、ぼくはやるよ、当然じゃない
かい？
ぼくは気を楽しにしてる、ぼくは信頼してるよ、だから賭けには出ないんだ」。
とても見事だ。彼は賭けには出ないのだ
自分の生気に満ちた

ヴァレンタインの贈物相手には——彼のピンクと黒の縞模様の飾り帯付きか
点描の絹織物。

トム・フルは鑿で彫ったような足の「重宝な馬」だ。君は舞踊手の
鼓動をある限度まで感じるか 競争者が皆容易に勝利を収める
船先でイルカの調和の取れた突進を感じ取るかする——

調子の合っているケンタウロスの脚のように、打楽器ケトルドラムが競い合う
 時のように、
 鼻はこわばらせ、スエード革の鼻孔は拡げて、軽やかな左手は手綱に都合
 良くなるまで——これは狂想曲だ。

勿論、優勝者といえば、ファッツ・ウォラー^⑥ がいた
 羽毛の感触で、キリンの眼で、あの手は降りてくる
 エイント・ミスビヘイヴンに！ オズイ・スミス^⑦ とユービー・ブレイク^⑧ は
 その雰囲気気を高くする。あなたはあのリピザナーを思い出さだろう
 テッド・アトキンソンがタイガー・スキンを攻撃した時に要した時間を——
 追跡者は一人も目に入らない——猫が挑ねて駆けてゆく。それであなたには
 猿が見えたかも知れない
 グレイハウンドに乗っているのを。「だが、トム・フルは……
 ——*The New Yorker*, 29 (June 13, 1953), 32.

[自注] ① 「六歳のジュリオ・ゴメス」の描いたラバと騎手。スペインの生徒の描画集より。スペイン共和国のための募金委員会に代って要請されて、ロードとテイラーが売却したもの。ルイズ・クレイン嬢から私が貰った。[カタツムリの前で驚いて立ち止っているラバに乗った騎手の、可憐なしかしかなか巧みな素描が複写されている——訳者注]

② デイヴィッド・C. シプリー師(*The Reverend David C. Shipley*), July 20, 1952.

③ マダム・ブフレ——マリー＝フランソワーズ＝カトリーヌ・ド・ボヴォ、ブフレ公爵夫人 (*Madame Boufflers — Marie-Françoise-Catherine de Beauvau, Marquise de Boufflers, 1711-86*) による。陸機の「文賦」(A.D. 261 - 303) に注釈を付けたアキリーズ・ファンク博士 (*Dr. Achilles Fang*) の注参照——彼の「文学に関する脚散文」(「脚散文」はドイツの中世文化研究者の“*Reimprosa*”に由来) : 「注に言う限り、私はルソーの同時代人と一体である。『手短かに言わねばならぬ／言いたいことを』…しかし私は『私は成功した』などとは言い張れない、特にマダル・ド・ブフレの指令に背いたので(「使われるのは避けねばならぬ、私が、私が」)」。 *Harvard Journal of Asiatic Studies*, Vol. 14, No.3, December 1951, p.529 (改訂, *New Mexico Quarterly*, September 1952)。

Air : Sentir avec ardeur 歌：熱烈に感じる

手短かに言わねばならぬ
言いたいことを、
長い話は
愚か者。

読めねばならぬ
書く前に
それも手短かに言えねば
言いたいことを、
長い話は
愚か者。

常にしていけないわけではない 話したり、
引用したり、
日付けを決めたりは、
だが聞くことはしなければ。
使われるのは避けねばならぬ
私が、私が、
以下の理由で、

それは横暴で
余りにも官学風
退屈，退屈
進め 彼と共に。
私はいつも振る舞う そのように
ここで
同じように
私はうまくいった。

手短かに言わねばならぬ
言いたいことを、

長い話は

愚か者。 [以上、フランス語の詩]

④ 私はある朝(1952年3月3日)「ニューヨーク・タイムズ」紙を開いて、アーサー・デイリー(Arthur Daley)の書いたテッド・アトキンソンとトム・フール(Ted Atkinson and Tom Fool)に関する閉み記事を読み、幻想に捉えられた。ヒル・ゲイル(Hill Gail)をどう思うかと訊ねられてテッド・アトキンソンは「あれは全く良い馬だ……全く良い」と一呼吸置いてから「しかしあれは、トム・フールにだけは及ばないと思う。ぼくはトム・フールの方を選ぶよ……この方がもっと努力を続けているしもっとしばしば努力する」と言った。サイテーション[三冠馬として史上初の百万ドル賞金を獲得した(1948年)サラブレッド——訳者注]だったら一レースに八、九回は加速疾走出来たことを思い出して「正にそうだ」と、テッドは熱烈に言った。「百ヤード加速疾走して元の速度に戻り、また百ヤード加速し、必要となればいつでもそういう余分の一駆けをするのが優勝馬の徴さ。ぼくはトム・フールについて知っていることから考えて、彼を『重宝な馬』だと呼びたい」。彼は他の二頭に言及して「彼らは唯一通りの走り方しかしない。だが、トム・フールは……」と述べた。それから私は、テッド・アトキンソンが鞍に跨っているトム・フールの写真(*New York Times*, April 1, 1952)を見て、少し敬意を表さなくてはと感じた。少しばかりそれと親しんで、それからくより良き明日のための青年連合から私は賞を受けてしまったことに気付き、全く当惑した。私は賭は嘆かわしく思っており、それまで一度も競馬を見たことがなかったのだ。それから「タイムズ」紙の1952年7月24日号でニコルズ(Joseph C. Nichols)がくベルモント・パーク>でのアナウンサーであるフレデリック・カポセラ(Frederic Capossela)についての記事を見たが、彼は会見でこう言っていた、「苛苛したかって? いや、一度も苛苛なんか……難所はどこか言ってあげよう。くベルモント・パーク>の直線路さ、そこでは28頭もの馬が3/4マイル向うの地点からこっち目がけて走ってくるのさ。だけどぼくはやったね。ぼくがやらないわけないだろうが? ぼくは気を楽しにしてたよ、信頼してるから賭には出ないのさ」。

アーサー・デイリーの書いた続編(*New York Times*, March 1, 1955)「金銭が全てではない」:『サラブレッドには変らぬ魅力があるね』とテッドは言った、『…連中は人間と大変似ている……私が初めて気に入ったのはレッド・

ヘイ (Red Hay) で、心臓の強い奴でね……そいつは常に挑戦し、常に最善を尽した」[デイリー氏：「同じことはアトキンソンにも当て嵌る」]『デヴル・ダイヴァ (Devil Diver) がいた……雌馬のスノウ・グース (Snow Goose) がいた。私の大いに気に入っていた一頭で……走りたがってね……しかし一たび本調子に入ると靴紐を手綱にして乗れるんだよ……それとコウルタウン (Coaltown) がいた、勿論他にもいたさ、だが、私のお気に入り中のお気に入りトム・フルと較べられるのに出会ったことは一度もなかったね。あいつはあらゆる馬の中でも最も個性があった……あいつを一目見るだけで火花が飛んだよ、彼は知性に充ちた頭をして知性に富む様子をしていて、全ての中でも最も知性があった。彼は優しい眼をし広い額をし——いやー全く、恋患いをしているガキみたいな言い方だね、しかしほくは思うが、ほくがこれまで何らかの関わりをもった馬の中でも最も堂々たる立派な顔をしていたよ、彼は偉大な馬だったが、ほくが彼を気に入っていたのは彼の成し遂げたことのせいではなくて、彼そのもののせいだったのさ』。そう言ってその陽気な名人セオドアは自らの右肩に番号札をくっつけて^{バドック}闊い地へ出かけて行った」。

⑤ リチャード・ウィルヘルムとケアリー・ベインズ (Richard Wilhelm and Cary Baynes) 訳の『易経、別名、変化の書』(*I Ching or Book of Changes*), Bollingen Series XIX (New York: Pantheon Books, 1950)。

⑥ Thomas Waller, 「変幻自在なジャズの名士」で1943年に死去。 *The New York Times* (March 16, 1952) の記事と Richard Tucker (Pix) の写真参照。

⑦ Osborne Smith. アイアン・ユゴー (Ian Hugo) の *Ai-Yé* のための音楽を即興演奏した黒人の歌手兼ドラマー。

⑧ Eubie Blake. 『足を引き摺ってゆけ』 *Shuffle Along* に出る黒人ピアニスト。

訳注 (1) ヨッパ (Joppa) は、ヤッフア (Jaffa) ——イスラエル中部の旧港町、1950年に Tel Aviv と合併——の古代名。ヨナ (Jonah) はヘブライの小預言者。不信心のために海に投じられて大魚に呑み込まれ、三日間その腹中にいた後、無事に投げ出された。不運をもたらすもの、不吉なもの、の意にもなる。

(2) cottontail. 北米産のワタウサギ属の尾が白いウサギの総称。

実技が優れているということは、困難に直面した時の耐久力とか能力の限り

頑張ろうという決意を見せるなど重要な徳目を備えている証拠だ、という信念を語る詩 (E. 134-35) である。ヨナの絶対に過誤を犯さないでおこうという意気込みを挫いた鯨と、蝸牛に驚いて立ち止まるラバと騎手を描いたスペインの少年の面白い過ちとを対比したこの作は、この少年を模倣する方が我々には望ましいのだという主張である (E. 135)。四月一日という「万愚節」にトム・フールの写真が掲載されたことに言及する茶目気は、詩を駄目にするとなしに殆ど滑稽などいってもよい程の諧謔の要素を包含できる能力となって現われるのであり、それは「グレイハウンドに猿が乗っている」のを見る処に示されている (E. 135)。

賭が実践される競馬に、道徳上の優れた面も見て取れるところは重要である。動物とスポーツ好きのムーアの面目が発揮されている作品であり、自注の巧みな援けも取り込んで臨場感を形象化することに成功していると見たい。最終連は第2, 5行, 第1, 4行が押韻するがそれ以外の四連はいずれも第2, 5行, 第4, 7行が押韻する。最後を言いさしの未完の状態で終らせているのは、この馬の特徴を完全に描出することは不可能であることを示している (E.136)。

Blessed Is The Man^① 幸いなるかなその人は

嘲る人の立場にならないのは——

侮辱したり、見くびったり、弾劾したりしない人は、
「不節制な特質など^②」ない人は、
「弁明したり、引き下ったり、言い逃れをしたりして聞き届けられるような^③」
ことのない人は。

(ああ、ジョルジョーネよ！ 居るのだ 不純にする人々が
接するものは何でも高める人々が、尤も十分あり得るのだが
もしもジョルジョーネの自画像^④が彼だと言えないなら
それは私の気に入るようにはないのだが。幸いなるかな 知っている天才は

自己中心癖は義務ではないと)。

「相違、議論、寛容^⑤」——あの「学識の
砦^⑥」には 我々を十分武装させる筈の堡壘がある。
幸いなるかな「決定の危険を犯す^⑦」人は——訊ねるのだ

自らに次の問いを、「それでその問題は解決しそうか？

それは私が見ているとおりに正しいのだろうか？ それはあらゆるものに最も
 も為めになるだろうか？」^⑦と

ああ、哀れなこと。ユリシーズの仲間^⑧たちは今や政治づいて——
 我儘勝手に生きて遂には道徳感覚を溺れさせてしまい

比較する力をすっかり喪失してしまい

行動の自由を考えることが人を解放する、「彼ら自身が束縛してきた奴隷」を。

鉄面皮な著者たちは、紛れもなく汚れ紛れもなく増長して、まるで健全で
 特別優れているみたいに、古くからの当世風気取りの^{まが}紛いものになり、

性格に反するミティン^⑨補強加工の良心になる。

「個人の嘘と公けの恥」^⑩に立腹して、幸いなるかな

傲慢なる人々が支持しないものを支持する著者は——
 応じないだろうから。幸いなるかな、服従しない人は。

幸いなるかな 所有欲とは異なった

信仰の人は——「正に現われている^{もの}事物^⑪」によって左右されない類いの人
 は——

余りにも決意が固くて畏縮などしておれず、敗北を思い描こうとしない人
 は、
 その照り輝いた眼で^い暴君^{スルタン}の塔を金ぴかに飾っている柱身を見たことのある人
 は。

—— *The Ladies' Home Journal*, 73 (August 1956), 101.

[自注] ① 詩篇 1 : 1.

② アイゼンハウアー内閣への攻撃に対して選挙参謀の下した評価。

③ コナントの『学識の砦』James B. Conant's *The Citadel of Learning* (New Haven: Yale University Press) を書評する Charles Poore——Lincoln を引用している。 *New York Times*, April 7, 1956.

④ ジョルジョーネ [Giorgione, 1478?-1511. イタリアのヴェネツィア派の画家——訳者注] の自画像。 *Life* (October 24, 1955) に複写された。

⑤ 注③のコナントの書。

⑥ ルイ・デュレク (Louis Dudek) : 「詩は…決定の危険を…犯さなくてはならない」。「我々の知っていることを、声高く明瞭に——そしてもし必要なら醜く——言うこと——そうすれば高度な技術をもってして何も言わないことよりはましだろう」。「新ラオコーン」, 『起源』 *Origin*, Winter-Spring 1956.

⑦ 「アイゼンハウアー大統領, 農場妥協案を拒否 [1956年の農業条例]」, *New York Times*, April 17, 1956 : 「それでは我々は、あまり必要としない時に或る農産物を余分に生産することになるだろう……もし我々が食べ切れなかったり売ることの出来ない農産物に天然資源が浪費されるなら、アメリカ人は全てを失ってしまう」。

⑧ 「ユリシーズの仲間たち」, 『ラ・フォンテーヌの寓話』 *The Fables of La Fontaine* (The Viking Press, 1954) [ムーアの訳書] の巻12, 寓話1.

⑨ Mitin (*la mite* 「蛾」, から)。ガイギー (Geigy) 化学会社研究科学者たち (スイス) の無臭無毒性製品。 *New York Times*, April 7, 1956.

⑩ 注⑥参照。

⑪ ヘブライ人への手紙 11 : 3.

関心が愛から至福へ動いたことを示す作品だ (E.140) と見るエンゲルの見解をみてみよう。ムーア自身の或る原理——傲慢, 所有欲への嫌悪など——の提示と共に, それらが当時流行していた<ビート派>の運動の考え方や技術とは異なることを, この詩は示しており (E. 140), 至福とは, 伝統には適っていても広く尊ばれているとはとてもみえない価値の実践から生ずるのだとムーアは考えている。そういう価値に達するには, 反抗したり自らの社会内で殉教者になる過程によってではなく, 己れを超然と保つことによるのだ (E. 140)。

書き出しの第一連 (標題が本文の第一行) は, バイブルへの言及, アイゼンハウアー大統領への攻撃からの文句, 及び書評者の引用したリンカーンの言葉——批判しない人, 不節制や弁明をしない人, 自らが正しいと思うことのために断固戦う人は, 幸いだと言明した——とを合体する。第二連は, ジョルジョーネの自画像への言及で, 彼の作品が通常無署名だという事実によって, 祝福される人は異常なまでの自己中心癖の所有者ではないのだと, 読者に警告する (E. 140)。

第四, 五連は, キルケーに大小種々の動物に変えられたユリシーズの部下たちが皆, 元の人間に戻ることを拒んだという寓話への言及である。

祝福される人は, ムーアの初期の詩に見られる「英雄」であり, 手を放れた

ものを欲しがったりしないのだが、今や彼は、伝統の標準に従順であるばかりか特に宗教心篤く倫理に適った行動をする人になる。ヘブライ人への手紙11：3の「この世界は神の言葉で形造られたのであり、従って見えるものは正に現われている事物から出来ているのではない」と覚る人である(E.140)。それは、ビート派の人々の原理とは異なるように、この詩も文芸批評における流行とは相容れないのだ(E.140-41)。ムーアが、祝福される人とはどのような人だと考えていたかが実に興味深く提示されている。初めの六連は全て第2行と3行とが押韻し、最終の第七連は第2, 3, 4行が押韻する。

In the Public Garden^① 公園で

ボストンには祝祭がある——
 全てのために合成されて——
 そして近くには、学問のドーム型建造物が
 (緋色、青、及び黄金色で)あつて
 教育を個人個人のものにしてきた。

私の最初の——並外れた
 殆ど聖書に現われるような——
 タクシーの運転手はバックベイ⁽¹⁾からケンブリッジへ向かう時
 その途上で言ったものだ、「ハーバードでは
 優れた若者を作り出していますよ」と。私は思い出す

その夏を、ファナル会館^②の
 黄金の玉とバツタ^③の付いた
 風見が再び金メッキされたのだ
 箔付け起重機によって
 それが金色に輝くまで。春が奇蹟になり得るのだ

そこでは——春らしいものの
 いつも以上の花束が——
 「雲より白い梨の花」、ピン
 オーク⁽²⁾の葉はめったに現われない

他の木々が影を作っている時に、小さな

妖精のアイリスの他には、それが相応しいのは
トボソの

ダルシネア⁽³⁾にだ、おおそうだ、そして雪の中の
スノードロップ⁽⁴⁾、その香りは
スマレのようだ。世俗のざわめきにも拘らず

私を入れたまえ<国王礼拝堂>に

彼らが歌うのを聞きに、「私の仕事が褒められますように
他の人々が往き来している間に。もはや他所者でも
客でもなく、家でくつろぐ
子供のようにだ」。礼拝堂あるいは祝祭は

相互のものであるものを与えるという意味だ

たとえ不合理にしる、

黒チョウザメの卵——イランの
ハマダン⁽⁵⁾からのラクダ

宝石、あるいは、もっと珍しいもの、

沈黙は——陳腐な人々の言葉瀑布の後で——

自由と同じ様に

得がたいものだ。それで 自由は何のために？

「自己鍛練^⑤」のために、我らの

勤勉この上ない市民が言ったように——学校の、

それは「せっせと働く自由」の、ためだ

道具を見分ける感覚を備えて。

荷物積み換え用野営地にいる人々は持っていなくてはならないのだ
技術を。自由を希望することが極めて危険に

晒されながら——売れる

薬草を採集する者がいる。

もしも彼らが思うなら不適格だ。

それで？

一時間話しそうな人々がいる

何故やって来たかを告げることも

なく。それで私は？ これはマドリガル⁽⁶⁾ではない——

中世のグラドゥアーレ⁽⁷⁾ではない。

それは感謝を示す物語なのだ——

詩人が所有しているものと思われている

あの光輝は備えていない——

公式ではなく、専門にも関わりなく。だがそれでも人は希って悪いわけは

ない 詩が当を得ていると

そこでは知性が常習なのだ——

喜ばしいことだ 詩の女神ミューズが家を構え白鳥を従えているとは——

そういう伝説は事実に基づくこともあり得るのだ、

幸せなことだ <芸術>が全般に賞讃されながら

常に実際に個人のものであるのは。

—— *The Boston Globe*, June 15, 1958, p. 6.

[自注] ① 元の標題は「祝祭」“A Festival”. 1958年6月15日にボストン芸術祭で朗読したもの。

② [ここからの5行]「ボストンの<埠頭広場> (Dock Square) のはずれにある市場の会館である…ファナル会館 (Faneil Hall) [公会堂。独立戦争の直前に独立派有志がここで会合したので、「自由の揺り籠」The Cradle of Liberty とも呼ばれる——訳者注] の頂上には…ウエイクフィールドの金箔師兼尖塔職人であるローリー・ヤング (Laurie Young) が、丸屋根と作られてから204年経つ有名なバツタとを金メッキした後、尖塔の棒に仕上げのペンキを施した」。 *Christian Science Monitor*, September 20, 1946.

③ 「シェム・ドラウン執事 (Deacon Shem Drowne) の金属製のバツタは、その創造者によって1749年にファナル会館の頂上に設置されたが…まるで今もなお、その種属の持つ全力を揮って飛び跳ねそうに見えるが…ロンドンの<王立商品取引所> (Royal Exchange) の頂上にある風見の精密な模造品だ

と考えられている」。 *Christian Science Monitor*, February 16, 1950. イートンの『ニューイングランドの工芸品』(Allen H. Eaton, *Crafts of New England* (New York: Harper, 1949)) を引用している。

④ 詩篇23—Virgil Thompson の編曲した、伝統になっている南部の調べ。

⑤ 「アイゼンハウアー大統領は、次の観察はクレマンソーのものだとした。『自由は自己鍛練以外の…何物でもない』…『そしてそのことは、自分自身で自力で立案した仕事は果すに—報酬の望みなしで果すに、値いする、という意味だ』」。 *New York Times*, May 6, 1958.

訳注 (1) Back Bay. ボストン市の繁華な住宅・商業地域。Cambridg は Harvard 大学の所在地。

(2) pinoak. ブナ科カシ属の木。アメリカ北東部産で、葉が深く羽状に分裂している。

(3) ドン・キホーテの恋人。

(4) 春、白い花を咲かせるヒガン花科の草。

(5) Hamadan. イラン中西部の都市。古代 Media 王国の首都。標高 1,642 m。

(6) madrigal. 多声歌曲、特に16世紀、イタリア、フランス、英国などで流行した、曲を付け易い抒情短詩で、恋愛を歌ったものが多い。

(7) gradual. 昇階唱。ミサ聖祭で使徒書翰と福音書との間に歌われる交誦聖歌。

公けに芸術が讃えられることに参与する詩人の立場が、詩人と読者に省察を呼び起こして、芸術の公けの機能とその個人性が考察される詩 (E.146) である。「国王礼拝堂」で聞かれる讚美歌からの引用で始まる第六連は、感謝の主題を導入し、恩寵への感謝を、及び祝祭における靈感への注意・敬意を相互に交わし合うという点で、礼拝堂と祝祭は似ているのだ (E.146)。そこからこの詩は、稀なるもの、「得がたい」「沈黙」への注視となり、これは、礼拝堂や芸術作品の中で生ずるものだ。そして「得がたい」のは「自由」も同様である。そこから「自由」と「自己鍛練」とは関連するというムーアのまた別の信条へ読者は導かれてゆく (E.146-47)。「家と白鳥」は、望ましい現実の環境と芸術の受容精神を表わす (E.147)。芸術が、祝祭のような機会に一般に讃えられながら、芸術家の生み出す個人のものであり続けることを、語り手は「幸せ」だ

と喜ぶ。芸術家は、自己を表現する自由と、一部分は沈黙から成る自由、公けから求められないということも必要だ。芸術には公けの役割があるが、それが芸術家への圧迫になっては困る、というのだ。こうして、ボストン、ハーバード大学、芸術祭は、要求を課することなく公聴の機会を芸術に与えてくれることに対して優雅に讃えられる。

招待された芸術家が群衆に呼び掛けるという習慣になっている公式を利用して、その名誉は個人にではなく芸術そのものに与えられたのだとして感謝を表明した詩 (E.147) ということになる。

初めの五行詩九連は、微妙な変化もつけながら第1, 2, 5行が押韻し、次の三行は sell/ail/Well? と一行目と三行目の押韻に二行目の変化のある音を配し、次の八行は、第3, 4行と第5, 8行が、最終連の六行は第2, 4行と、第5, 6行が押韻する。

三ヶ月後に公刊された次の作品は、ジャコウウシの性質に托して、ムーアが、親しみ深さ、平和愛感性、知性という特色を讃えた詩である。

The Arctic Ox (or Goat) 北極牡牛（もしくは山羊）

John J. Teal ノ「北極の金の羊毛⁽¹⁾」ニ由来スル。彼ハ、ヴァーモント州ノ自ラノ農場デ、ジャコウウシ⁽²⁾ヲ飼育シテイル、*Atlantic Monthly* 誌ノ1958年3月号デ彼ガ明ラカニシタトオリニ。

北極狐を着るには

それを殺さなければならない。着よう

キヴィウト⁽³⁾——北極牡牛の下生えの毛——を
セーターのように引っ張って脱いで、
君の上着は暖かだ、君の道義心は、更によい。

私は一着洋服が欲しい

キヴィウトのが、非常に軽いので私には

分らなかったのだ 自分がそれを着ているのだと、それで
時が経つうちにもう一着、
私が殺さなくてもよかったから

最初の洋服になった羊毛を
育てた「山羊」を。ジャコウウシには
麝香はないし それは牡牛ではない——
無学な形容辞だ。
濡れている時に鼻を毛の中に埋めるがよい。

それは水の匂いがする。他でもなく、
それで山羊のように草を食べる
元気になって。その大きな特徴は
自己中心の匂いがしないことで
知能が高いということだ。

チンチラ⁽⁴⁾、カワウソ、マスクラット⁽⁵⁾、
それにビーヴァーは、私たちを温かく保ってくれる
が 考えてもみよう！ 「ジャコウウシ」は六ポンドもの
キヴィウトを産出するのだ、カシミア牡羊は、
三オンス——それで全て——のパシーム⁽⁶⁾を。

風雨に晒された場所に横たわり
猛吹雪に当たりながら
こういうくずっしりしたもの⁽⁷⁾なら支配できそうだ
カシヤンの希少毛市場を、それでも
あなたはこれ以上高級な愛玩動物は持てないだろう。

彼らはあなたが働く時には協力し
穴から出たり入ったりしながら跳ね飛ぶことを好み、
水中で子供たちと遊び
分りが早く、子供らの名前を知って、
門を開け、遊戯を発明するだろう。

求愛できないわけでは
ないので、その間、彼らは見つけれそうだ
そわそわと隷従してくれるものを、過剰なのだ

プロクルステス⁽⁸⁾の寝台のように、
だから未婚のままにしようと心に決めるものもある。

ラクダは俗物根性であり
羊は、知性に乏しい、
スイギュウは、神経衰弱で——
殺人さえ犯しかねない。
トナカイは厳粛すぎるようにみえる、

他方これら乏しいキヴィウト類なら
金羊毛と勝利を収めるやり方で
あらゆる毛皮獣を追い越しながら——
ヴァーモントの静謐の中を——
＜豪胆支配者＞⁽⁹⁾の常食を要求できるだろう、

＜山岳溪谷＞水、
タンポポ、人參、カラスムギ——
寝台によって鼓舞されもして
一日に三度新鮮にされて
干し草の中どころがり浮かれ騒ぐ⁽¹⁰⁾のだ。

柳の葉だけでは
飽き足らなくて、我らの山羊のような
キヴィウト曲線状の山羊座は
巢のために理想をかなぐり棄てる。
鳴き鳥たちはキヴィウトが最良だと分るのだ。

もしそれを一袋持って
いたなら、あなたは一ポンドを
二十四、五マイルの糸に
紡げるだろう——一つは四十絢撚りに——
それはどのように染めても縮むことはないだろう。

もしあなたが広告を

読んでいるのかと恐れるなら、

そうなのだ。もし私たちがこういう動物たちの

被毛に心温まる思いになれるなら

私たちは凍りついても当然だろうと 私は思う。

— *The New Yorker*, 34 (September 13, 1958), 40.

訳注 (1) Golden Fleece. ギリシャ神話。アイエテス (Aeëtes) 王がコリス (Colchis. コーカサス南方の黒海に臨むアジアの古代の国) に保管しておいた金色の羊毛。英雄イアソン (Jason) とアルゴ船隊員 (Argonauts) がアイエテス王の娘メディア (Medea) の助けを借りて盗み出した。

(2) musk oxen. 羊と牛の中間種。北米の寒帯及びグリーンランド産。

(3) qiviut. ジャコウウシの下生えの毛。淡褐色で柔らかく絹状。

(4) chinchilla. 南米産の齧歯動物。柔らかで銀灰色の毛が好まれて飼育される。

(5) water-rat. 水辺に生息する齧歯動物の総称。

(6) pashm. インドの Kashmir, Punjab 地方で飼育される山羊の下腹の毛。

(7) ponderosos. ポルトガル語, スペイン語の形容詞 (重量のある, 落ち着いた, 思慮深い, 慎重な, 真面目な, 等) の名詞用法, 複数形。

(8) Procrustes. ギリシャ神話。旅人を自分の寝台に寝かせて, それに合わせて, 身長を引き伸ばしたり切り詰めた盗賊。

(9) Bold Ruler. 人間を指したものか?

(10) この一行は “to roll and revel in the hay”. “roll in the hay” は, 「性交為をする」の意。

「私が殺さなくてもよかったから」もう一着欲しいと言う。こういう醒めた自己諷刺の諧謔が、ムーアの作品を常に硬質で透き通った鋭いものにするのである。「濡れている時に」最も体臭が分かることなども、実に動物を熟知している作者らしさである。全て四行目と五行目が押韻する。

Saint Nicholas⁽¹⁾ 聖ニコラス様

もしかして私には、あなたがお見つけになれたら戴けるでしょうか

尾のあるカメレオン①を
腕時計のゼンマイのように巻いている尾の、それを垂直に
胴体——顔も含めて——の上に立てて青白い
虎斑模様が、七箇所ほどあるのを、
（皮膚のメラニンが
薄い縞によって太陽から
遮られていて、背椎の円蓋は
背筋伝いにビーズで飾られていて
まるでそれはプラチナみたいなのを）？

縞模様のカメレオンをお見つけになれば
もしかして私には戴けるでしょうか　ドレスかスーツを——
お聞き及びとは存じますが——キヴィウト製のを？
そしてそれと一緒に着るためですが　タスロン⁽²⁾ シャツを、絞って干すだけの
人後に落ちない探究の成果のを、
望むらくは<エクセロ>縫製のを、
ボタンは斜め十字の交わる上にまで下げて、いや、それは結構。
シャツは白く出来ますし——
それに「六時前に着る」ことが出来ましょう、
日中も夜中も。

しかしもし、ドレスを戴けないなら、私には下さいますな、
グリーンランドへの旅は、月への
厳しい旅は。月はここへ来させるべきもの。彼に
その旅を小さく仕立て直させ、私の暗い床に何か幽かな
驚異を拵げさせよう、そしてもし巧くいって
私が屈んで拾^{かが}い上げて着ることになるなら
もうこれ以上は何も私には求められますまい。更にもっと稀なものは、
それでも、まだ異なったものが
あるとすれば、こんなものでしょうか、ハンス・フォン・マレの
聖フベルトゥス⁽³⁾です、頭を下げたままながら

背筋を伸ばしている——ビロードを纏って慎みの余り緊張して——

手をだらりと垂れて、馬は自由なまま。
 原物ではありません、勿論。私に下さい
 その場面の絵ハガキを——狩人にして神——

狩猟狂いのフベルトゥスは はっとさせられて聖人になったのでした
 < 徴 ^{しるし} > を纏わせた牡鹿に。

だがどうしてあなたに、あなたが予知された筈のことを告げる必要があります。
 しょう。

聖ニコラス様、おおサンタクロース、
 それを戴ければ これまでなかったほどの
 最高の贈物にならないわけがありませんか！

—— *The New Yorker*, 34 (December 27, 1958), 28.

[自注] ① *Life* 誌1958年9月15日号の写真参照。首都 Washington D. C. の国立博物館の爬虫類・両棲類部長ドリス・M. コ克蘭博士 (Dr. Doris M. Cochran) の手紙付載。

訳注 (1) 聖ニコラスは四世紀のミュラ (Myra. 小アジア南西部にあった古代のリュキア [Lycia] 地方の港町) の司教。ロシアその他の国々の守護聖人であり、子供、船乗り、商人の保護聖者。祝日は12月6日であり、サンタクロースはこの司教の名に因むのは言うまでもない。

(2) *taslon. taslan* (特殊加工糸——商標) であろう。

(3) 聖フベルトゥス (St. Hubert, ?-727) は、リエージュ (Liège. ベルギー東部 Meuse 川に臨む都市) の司教。狩りの最中、両角の間に十字架を生やした白い牡鹿に出逢ってキリスト教に帰依したというので、狩猟の守護聖人である。

内部の精神に起因するとムーアが考え、讃える特質の多くを北極牡牛が体現していると表明した作品の次に発表されたのが、「ニューヨーカー」誌のクリスマス号用のこの詩である。「自分が備えていたいと希う類いの、創造力を刺戟するようなもの」が、クリスマスの贈物を聖人にねだるという形で「戯れめかしてしかし決然と」定義された (E. 148)。

まず、「慎しみ、<沈黙>、自己鍛練を尊しとする詩人なら当然と思われる、欲望の抑制という態度を直ちに取れる」カメレオンを希望する。動物に対するこういう微細な観察を手際よく簡潔に描写する力は、ムーアが常に示すもので

ある。次には、変り種で凝ったものではあるが望んでも差し障りない程度のシャツを希う。だが、グリーンランドや月への旅までは望まないと、願望の極端には到らないことを強調する。月から、更にもっと稀なものへのしかしやはり慎しい欲求、それがフベルトゥス聖人の絵ハガキだが、この聖人の「頭を下げて跪きながら」しかも「背筋を伸ばして」「慎しみの余り緊張して」という姿勢はムーアが良しとするものである (E.148)。最後に、聖ニコラスが私に相応しいとされるもので、実は十分だと、慎しさに駄目を押す (E.149)。

第三連の、擬人化された月（男性）が床に拡げてみせた「驚異」を拾い上げて着用する、という見事な譬喩に、筆者は、ムーアが慈しんだ後輩の詩人ビショップ (Elizabeth Bishop, 1911-79) の「人蛾」“Man-Moth”³ の影を見る。

十行四連から成るこの洒落れた機智に富む作品は、各連共殆んど正確に、第1, 5行, 第2, 3, 4行, 第6, 7行, 第8, 10行が押韻する入念な結構を誇る。この詩は、これから一カ月半後に公表した「二月十四日のために」(神への愛を示して聖ヴァレンタインに呼び掛けた詩)と呼応する。

Combat Cultural⁽¹⁾ 文化の闘争

人は見たがる のろまのミヤマガラスの高
速度を 暗くなる前に飛翔しきろうと日没時に急ぐのを,
あるいは勲章ものへとよく訓練された上昇ぶりを,
障害物に備えて前脚を折り曲げて——
あるいは大気になって飛び跳ねてゆく集団を。

私は思い出す コサック人の
或る文書を、眼に見える遁走曲を、首を
胴から切り離しそうにみえた
剣の鞘を——まるでスケルツォ⁽²⁾の中で
豎琴の弦を抜け出るかのように歩む足を。しかし、

私のためには古いロシアのカドリール⁽³⁾が。
何となくだらりと垂らしたハンカチを
鞭をびしっと鳴らすように鳴らして、

精神錯乱のようにくるくる回った頃合の

フロックコートのスカートは、ぐるぐる廻らず うなだれている

遠く離れた遊歩道で。ええっと…

古いロシアと、私は言ったのだったか？ 冷たいロシアと

今度は。第一級のバニーハゲ⁽⁴⁾、

絨緞で格闘する人たちの足をすくい強打する

専門家の壇上もの。

「眠っていて」明らかに床に就く姿勢になって——
素早い一撃を食い、一蹴り受けて壁に釘付けにされて

彼らは端へ動いて行って行き止り

よるめき、そして人は犠牲になるのだ

突然の転換の犠牲に——脚が脚の周りを旋回する、ひっきりなしに。

「芸術の中には、高度の質のせいで
よく売れることを望めそうにないものもある」、
そのとおり、そのとおり。だがここでは、おお駄目だ、
凍った北極のナナイ人^①には当て嵌らない
彼らは厳しいきわどい状態で眠っている。

これら戦士たちは 全て同一の衣服を着て——
正に一人の人^②が——双生児のようにみえることで
寓意を強調するかも知れない、私が告白するとすればだが、
我らには<思慮分別>を何らかの物体で表徴する
部分を セメントで固めなければならない。

—— *The New Yorker*, 35 (June 9, 1959), 40.

[自注] ① Nan-ai-ans [シベリア南東部から満州北東部のアムール (Amur) 川下流域に住み、狩猟、漁撈を営むツングース系民族——訳注] はソビエト連邦 [1959年当時は無論存在した——訳注] の凍った北部に居住する。

② レフ・ゴロヴァノフ (Lev Golovanov), 「闘う少年二人」。モイセーエフ舞踊団のイーゴル・モイセーエフ (Igor Moiseyev) による舞台。1958年ニュー

ヨークで、ソル・フロク (Sol Hurok) の演出による。

訳注 (1) 「耕作の」の意だが“culturel”だと見ることにする。

(2) scherzo. 諧謔曲，軽快な拍子の音楽。

(3) quadrille. 主に6/8と2/4 拍子のゆっくりした速度の舞曲。

(4) bunnyhug. 20世紀初期アメリカで流行した舞踏場用ダンス。ラグタイムの旋律に合わせ互いにきつく抱き合って踊る。

双生児兄弟の衣装で戦いの場面を演ずる二人の舞踏手を観て得たその訓練ぶりを讃えた詩 (E. 149) である。この詩の寓意は、最後の〈思慮分別〉(sagesse) と倫理に適った行動を表象する物体性のある要素を、統合する必要がある、即ち、芸術作品というのはその包含する多様さの限りを統合すべきだ、というものの (E. 149)。

飛び跳ねる活発な動物の様々な場面への言及に始まり、ロシアの舞踏へ、それから、戦士同士が毛布で一緒にくるまれて取っ組み合う北極地方ロシアのサック (ずだ袋) ダンスへと、ムーアの常なのだが直接には無関係と見えるものでその目的へ向かってゆく (E. 149)。

どの連も全て三行目と六行目が押韻する。

Tell Me, Tell Me 教えて、教えて

どこに避難所がありそうかを 私が
自己本位と

その傾向から離れて連続性を
両断し、述べ誤り、誤解し

忘却してもよさそうな所があるのかを。

何故、おお何故、人は敢えて訊ね、
噴石のある高峰を平らにするのか
まるでネルソン卿⁽¹⁾の回転式のダイヤモンド円花飾り⁽²⁾にそうするかのように。

それは現われた。宝石、磨き出された貴重品
にして繊細の極地――

何を根拠にしても切っ掛けになる
苦情の種^{なほ}に照して――夢中にさせる

幻想の幾何学。

一人のジェイムズ、ポッター嬢⁽²⁾、中国の
「特別なものへの情熱」は
それでも夕昏れには サクランボ色の
傑作を切り出す疲れた人のもの——

仕立屋にして裁断師の陪審員を求めてではなく——

二、三匹のハツカネズミだけが見ているが、
彼らは「不一致を吸呼し矛盾を
呑み込んで^②」、目を眩まされるのだ
太陽にはなく「影立つ
可能性」によって。(私が指しているのは
ヘンリー・ジェイムズ と ベアトリックス・ポッターの〈仕立屋〉)。
確かに、救い出されたグロスターの
仕立屋さん、私は逃げようと

思う、工学上の方策——

蝮の爬行結節——によって逃げてゆこう
形而上学の刈りたての干し草の所へ、
スイカズラへ、はたまた、森林の芳香へ。

人はもしかして言ったり仄かしたりするだろうか T. S. V. P.⁽³⁾ と——
〈黙れってんですか?〉「どうかお願い」は意味をなさないのだ
言葉の蛮行から避難する者には、私は
当惑している。そうは言っても、「敬意」は、
そうだ、敬意は私の防禦になろう。

明確に？

この昔に遡って語られる伝記では
その猫の捕えたハツカネズミは グロスターの
仕立屋に解き放ってもらおうと
市長のサクランボ色の上着に仕上げの処理を施したのだ——
その仕立屋の物語は 捕われの身を
二つの意味で終らせたのだ。仕立屋の身代を作った

上着について語られるほかにも

それは読者を救ったのだ

厳しい叱責によって狂気に駆り立てられることから。

— *The New Yorker*, 36 (April 30, 1960), 44.

[自注] ① ホワイトホール (Whitehall) 博物館に。

② 「我々の教育にあっては字義どおりのものの果す役割が、おそらくかつてどの教育でもそうだったように小さなものだったので、我々は健康のために、不一致を呼吸し、色々な矛盾を飲み食いしたのだ」。Henry James 著『自伝』*Autobiography* (『小さな少年その他』『息子と兄弟の覚え書』『中年』), F. W. Dupee 編 (New York: Criterion, 1958).

訳注 (1) Nelson, Viscount Horatio (1758-1805). 提督。Trafalgar の海戦でフランス・スペイン連合艦隊を撃滅してナポレオンの英国本土上陸を阻止したが、その際、戦死した。

(2) 次の連の七行目の、Henry James (1843-1916) と Beatrix Potter (1866-1943) [英国の童話作家・挿し絵画家]。

(3) Tournez s'il vous plaît = Please turn over 「裏面に続く」

自己鍛練と抑制が必要だと信ずる詩人は如何にして、表現の統一性を破らせることになり言葉の暴虐を生み出す自己中心性を、避けるかが、この詩の主題 (E. 151) である。過度の個人主義は、人に連続性を忘却させ、噴石のある高峰を平らにさせる。高峰がダイヤモンド円花飾りを詩人の記憶に呼び戻すが、それはその、幾何学に関する技量の故に「特別なものへの情熱」の産物のようにみえるからである。高峰について考えることはヘンリー・ジェームズやベアトリックス・ポッターに相応しい。そのような情熱に、自己本位からの「逃避」が在る。精神の領域と「物体」の領域はムーアにとっては共に存在する。自らの健康よりも任務に関心を抱いたポッターの仕立屋について読むことで、詩人は自作に集中出来、従って自分自身から、自己本位の過失から、救われた。最後の箇処の、救われた読者とはこの詩人自身のことだ (E. 152)。各連共第 1, 2, 5 行及び第 6, 8 行が押韻する (第一連は 8 行なので第 6, 8 行が押韻し、最後の連は「明確に？」を除外してみるとこの規則に当て嵌る)。

Carnegie Hall⁽¹⁾: Rescued カーネギーホール: 救済さる

「それは一面に広げる」、その組織活動を——続行されているのだ
長距離電話によって、

「聖ディオゲネス
最高司令官^①」に。

十一時の

五十九分に、救済者が

カーネギー氏の音楽堂のために
場所を空けるのだが、それは徐々に

成ったのだ（成るのだ）

我らの音楽の要塞に

（「ネ」に強調が置かれている、おそらく
あなたには言うまでもないだろうが）。

パデレフスキー⁽²⁾の「女神パラスの
威厳^②」が それを神殿にしたのだ、

チャイコフスキーは、勿論、

柿落としの

夜に、1891年の、

そしてギレリス⁽³⁾、巨匠が、演奏して。

アンドルー・C. と R 氏と共に、

「我らの先鋒、^{スターン}花形氏」——

音楽における、スターン⁽⁴⁾が——

討論向けにしてくれた、

そして市民の敬虔によって

我らの市の恐慌状態を救ってくれたのだ。

音楽堂の救済者が

脅かされるのは「不動産の

人喰い人」によってで——強引に押し通る権勢家、

土地収奪者、新生児のように

縮こまったままにさせる人間蟹だ。

「子供たちを擁護する」ヴェネツィアが
市民に禁じてきたのは
「伝統となってきた
気高い行動」によって
「余りにも奇妙な姿形の、もしくは貧弱な衣装」を であつたように
後世は失敗を

我らの、栄光を破壊した者たちのせいにするかも知れない。ジャン・コクトー
の「過去への序文」は こういう一節を含んでいる
「非常に若かった頃 私の夢は
純粹に栄光に充ちていた」と。
彼は言わねばならないのか、「明るい夢」に
充ちて「いた」し、それが我らのきらめき輝く物語を確証するのだと。

彼らには彼らの古い褐色の家が必要だ。チェロ奏者、
ヴァイオリン奏者、ピアノ奏者は——
音楽に関わりのない
深く浸透するもの特有の
どっしりした石工工事に慣れているので——見つけていたのだ
戻ってゆく理由を。賞讃の

幻想曲と正面への突進が
演奏者に付き纏う。我らは追跡して
あなたを突き止める、聖ディオゲネスよ——
あなたに感謝しているのだ きらきら輝いていることに
救助へと突進してゆくことに
まるであなたは自分自身の演奏を聞いているみたいだった。

—— “Glory” in *The New Yorker*, 36 (August 13, 1960), 37.

[自注] ① 「町の話題」 *The New Yorker*, April 9, 1960.

② ギルバート・ミルシュタイン (Gilbert Millstein), *The New York Times Magazine*, May 22, 1960.

訳注 (1) ニューヨーク市の最も有名なコンサートホール。1891年に開場。

1898年の改築資金の提供者 Andrew Carnegie (1835-1919. スコットランド生れのアメリカの製鉄業者、カーネギー財団を設立して公共事業に貢献した)の名に因む。

(2) Ignace Paderewski (1860-1941). ポーランドのピアニスト, 作曲家, 政治家, 初代首相・外相 (1919)。

(3) Emil Grigoryevich Gilels (1916-85). ソ連のピアニスト。

(4) Isaac Stern (1920-). ロシア生れのアメリカのヴァイオリン奏者。

芸術に関わるものを救済するというのがこの詩の主題で、有名な音楽堂を取り壊し作業から救出しようという運動が成功したことを喜ぶ (E. 152)。最初の引用はムーア自身の言葉。率先してこの運動に尽力したスターン (Stern) を、ドイツ語では“star”の意なのでそれを“Mr. Star”と呼んで、以下、様々に賞讃した。彼を主に、手燭を掲げて市中を正直者を探し回ったというギリシャの哲学者ディオゲネスに擬して「聖」なる敬称を付した (E. 152)。

要塞に「成った (成る)」「became (become)」は、これまでがそうだったように今後も音楽の要塞になるだろう、の意以外にも、長年の使用によって神殿のようになり、それで中で演奏される芸術に相応しい (becoming) 伴侶になるだろう、の意も示唆する (E. 153)。

“Carnegie”の“ne”の強い発音に注意を促すのは、諧謔の他に、「音楽」をわざわざ強調する機知の發揮 (E. 153) である。

“R氏”は、この音楽堂を救った貢献者の一人、Frederick W. Richmondで、彼らの努力が、新生児のような萎縮状態をもたらす不動産開発業者の脅威を、防いだのだ (E. 153)。

価値ある建築上の「栄光」“glory” [初出時の標題だった] を破壊する人々は、あの、子供たちが見倣うべき適切な模範を示すように上品に身を装うべしという市当局の指示に従わなかったヴェネツィア人同様に間違っている、というのが第六、第七連 (E. 153)。

演奏者に付き纏う (dog-動詞) 賞讃という考えが、再びディオゲネスを喚び出すが、彼は「犬」“dog”と呼ばれて冷笑されていた (E. 153) のだった (「犬儒派」の由来)。

「自分自身の演奏を聞いているみたい」に救済にやって来た「きらきら輝いている」“glittering” ヴァイオリニストを讃えることでこの詩は終る。丁度真中の第五連のみが5行で第1, 2行と第3, 5行が押韻する他、残りの八連は

全て6行詩で、第1, 2行と第4, 6行が押韻する。次に発表したのも、救助が主題である。

Rescue with Yul Brynner⁽¹⁾ ユル・ブリンナーと一緒にの救済

1959-1960年ノ国連難民高等弁務官ノ特別顧問ニ任命サレテ

「独奏会？『演奏会』というのがぴったりだ、
 しかも目の覚めるような、ブタペスト交響樂團によるもの——
 追い出されても怯んだりはず——
 私に耳を傾けさせて、
 尤もそこで超然としてだが
 草刈り機を見逃したことに気付
 かなかったバッタのように、小人の住んだ、
 余りにも、と私は言いたいが、ゆっくりした育ちの事例だ。
 三千万人がいた、千三百万人がまだいる——
 まず健康であることだが、病気になるまで待ち続けたのだ。
 歴史が判断を下す。それは
 ウィニペグ⁽²⁾の信じられない状況に
 敬意を表するだろう、「病気で、後援者なし、そして如何なる技能もない」。
 異常だ——ギターを携えた報道者——一つの難問。
 神秘に充ちたユルは 目をくらませに来たのではなかった。

多様な舌を備えた魔法の小鳥は——
 五枚の舌を——狂った十二カ月の放浪者になる素養を身につけて
 (重い足取り)、彼はその呪われた人々の
 間を飛び回り、各々の収容所を捜し出したが
 そこでは希望がゆるやかに死んでいったのだった
 (飛行機を見たことのないものもいた)。
 自らを羽毛で覆う代りに、彼は例証したのだ
 自らに当て嵌めて 黄金を省く規則を。
 彼は言った、「あなたは奇妙だと感じるかも知れないが、これ以上にどうでも
 いいものはない。

誰も注目しないが、あなたは何かしら幸せを見い出すだろう。
 新たなく大きな恐れ>はない、難儀はないのだ」と。

ユルには歌えるのだ——魔女の双子の片割れ——

銀のспанコールを付けた衣装で象に運ばれる踊り子、

鼻で高々とぐるぐる廻され、先端に星付きの杖を持ったタマラは
 ハンガリア交響楽団^①と同様、拍子に忠実だ。

ギターの上に頭を垂れて、

彼は殆どハミングしていないようにみえた、「全て故郷に帰る」を終えた、

微笑まなかった、空路やって来た、

来なくてもすんだのに。

ギターは一つの事件だった。

栄誉ある客たちは踊ることが出来ない、微笑まない。

「住むところあるの？」と一人の少年が訊ねる。「ぼくたちテントの中に住
 むんですか？」

「家の中にだよ」とユルが答える。彼のきちんとした布の帽子には

顔に反映している輝きのようなものは全く見当たらない

その顔は、彼が今居る所とは似ても似つかぬ豪邸を

特色づけているミルクウィード・ウィッチ⁽³⁾の種子の褐色をしている。

彼のゆったりとした歩みは、しかしながら、

王者のものだ。「君には広い場所がたっぷりあるだろう」。

ユールだ⁽⁴⁾—— クリスマスの火の物語の紡ぎ手のためのユールログ⁽⁵⁾——

実現し得るお伽話に充ちて、ユル・プリンナーは。

—— *The New Yorker*, 37 (May 20, 1961), 40.

[自注] ユル・プリンナー著『子供たちを産もう』*Bring Forth the Children*
 (New York: McGraw-Hill, 1960) 参照。

① ゴルターン・コダーイ (Zoltán Kodály) 指揮。

訳注 (1) アメリカの俳優 (1920-86)。『王様と私』*The King and I* (1956)
 に主演。

(2) Winnipeg. カナダ中南部の州 Manitoba の州都、人口62万。湖と川の名
 でもある。

(3) この植物未詳。milkweed は白い乳液を分泌するガガイモ科トウワタ属

の総称。

(4) Yule. キリスト降誕祭。

(5) Yul log. “Yule log” (クリスマスに炉の台木として用いる大薪) との掛け言葉。

避難と救済の主題を探求する (E. 154) 作品で、第二次世界大戦後の難民とその病人を受け入れたカナダの都市ウィニペグの親切と、難民収容所を訪れて激励するユル・プリンナーの美德とを讃える。プリンナーのギター、帽子、難民との会話 [因に最終連13行目は同じく8行目の難民の少年への答の続き] は彼の著書から。双子の片割れ、とは『王様と私』の中のプリンナーの役柄であり、タマラもその作中に登場する。「舌」は言語を表わし、プリンナーは小鳥に譬えられる。「豪邸」は難民収容所を指す。最後の箇所は、クリスマス季節のキリスト降誕祭 (Yule) とプリンナーの名前 “Yul” との地口で、彼は難民救援という行動によって、芝居の中だけではなく真物の「王様」に今やなったのだと、キリスト教徒としての彼の営為を讃える (E. 155)。

当時、未だ1300万人いた難民は、その後も次々に新たに発生し続けて40年近くになる。世界中の難民が「全て故郷に帰る」日は、実現から遙かに遠いまま、20世紀は終ろうとしている。

15行ずつ三連の作品は、各連とも、第1, 3行, 第2, 4行, 第5, 7行, 第9, 10, 11, 12, 13行, 第14, 15行が (若干は疑似韻) それぞれ押韻する。

Blue Bug 青虫

トマス・マカヴォイ撮影ニヨル他ノ七頭ノ小馬ト一緒ニ
イル ラワース・ウィリアムズ博士ノ<青虫>ヲ見テ。

『図解スポーツ』誌。

このカメラの一画面の中に
君が隠れているあの見事な写真からだが
(側面からの八頭の小马の肖像),
君はそれと認めるようだ
気付いている眼だなど
機敏なく^{バグ}虫>よ。

一部で言われたただだが、おそらく、仄めかされてきたのだ

君は出場馬になるようだと。

私には分からない どういうわけで君にそのような名前がついたのか
それに尋ねたくもない。

「私は邪魔しているのだ」と言ってそのとおりに
行なう厄介者ほど
罰したいものはない。

私には見当がついた、と思う。
私は好きだ 巢のようにみえる顔が、

「その眼を入れる単なる容器」が——
隅が三角形の——そして
干し草用フォーク型の両耳がびんと平行していて、

虫になった兄弟なのだ アーサー
ミッチェル蜻蛉⁽¹⁾の
左へ素早く
右へ素早く、裏返しになれるのだ

「古代中国の旋律に見られる
回音⁽²⁾、十三本の
ねじった絹糸の三本指での独奏」のように。
ほう、そのとおりで、黄河の
渦巻き紋の正確さは
君なりのものだ
何か類似のもの——ポロ⁽³⁾の。

それを言い直せば
ペロ、私は回転する、
ポロス、つまり軸で。

もしも 少し入念であれば
ルドン (オディロン)⁽⁴⁾ は思い出したであろう。

自分が考えたということ、その眼のことを、
 回転することを———どういうわけか娯楽と結びつけられるのだが———
 仕事である娯楽を、
 筋骨逞しい従順さを、
 はたまた知力を、

軽業師 リ・シアウ・タン の場合同様

手長猿めいているが更にもっと敏捷で
 重力に平然と抗い
 下側は反り上がって、
 頭にコップをのせてひっくり返さず———
 中国の正に最も創意工夫に富む者。

———*The New Yorker*, 38 (May 26, 1962), 40.

訳注 (1) Arthur Mitchell. New York 市立バレエ団最初の黒人舞踏家。最初の黒人バレエ団である「ハーレム舞踏劇場」の創立者。この詩を発表した四カ月前に、ムーアは、“Arthur Mitchell”なる標題の九行の軽妙な詩を発表し、この舞踏家を蜻蛉に譬えた。

(2) turn. 主音符とその上下二度の補助音で形成される装飾音の一種。

(3) polo. 四人一組のチーム同士二組が競う馬上競技。木の柄付きの長い打球槌 mallet で木球を打って相手ゴールに入れる。この詩の“Blue Bug”（青虫）は、ポロ競技用に訓練された敏捷な一頭の小馬（polo pony）の名前。

(4) Odilon Redon (1840-1916). フランスの画家・版画家。

芸術と運動との類比は、精神の重要性を示唆するのに役立っている (E. 156) とエンゲルは言う。標題は、『図解スポーツ』*Sports Illustrated* (November 13, 1961) で見たポロ用小馬の名だと説明してからムーアは、自分自身との近似に注意を惹く (E. 157)。それから、質問で人を煩わせる人々の押しつけがましさを批評する。その小馬が方向を素早く変えられる能力を備えていることから、この〈青虫〉は蜻蛉のようなある舞踏家と似ていると言う。次にこの小馬の能力と中国のある旋律の輻輳さとの類比になる。その調べは、ポロで小馬が様々に動くその動きを別の形で正確に表わしたものだという (E.157)。

自分自身と小馬との類似を見つけ、小馬と芸術作品が似ていると明言すると

ムーアは、それを「言い直す」ことでその類比を最高潮へと高める。“polo”は、その球技で使われる球を表わすチベット語に実際は由来するがロマンス語の単語のようにみえる。それが彼女が、“pelo”（これを彼女は「私は回転する」と訳す），“polos”（回転している物体の極性軸を表わすスペイン語の複数形）と、その競技の名称との類似を示唆しながら、一寸した文章作法を手に入れるのに利用する事実である（E.157）。芸術家であるムーアは、小馬や中国の旋律同様、「軸」“pivot”で回転するのだと我々は告げられる。その含意は多様だが、全ては精神の軸で回転するから類縁がある、というものだ。その類比は「少し入念」かも知れないが、回転するという観念と「娯楽」“pastime”という考えとの間の関係は、フランス後期印象派の画家オディロン・ルドンのことを考えて示唆されたのだ、とこの詩は説く（E.157）。この画家の名前それ自体が、その音によってムーアを喜ばせたに相違ない。彼女はルドンの主張——芸術家は一たび自らの言語に習熟すると、直接の観察からだけではなく歴史と詩から引き出された主題を自在に扱えるようになる筈だ——に賛成するだろう（E.157）。「野球と書くこと」が、芸術家と運動選手は「頑張る」必要はあるが「それを楽しむ」べきだということを見い出したよう⁴に、この「青虫」では、ルドンが採った芸術は「仕事である娯楽」だとされる。人は、ある中国の軽業師が見せるような肉体の制禦力と機敏な精神構造を備えるべきだ。最終連はこのことを特殊化する。そこでムーアは、いつものように、自らの行なう一般化を特殊な図柄の中に根拠づけるのだ（E.157）。ポロが東洋から西洋へ伝来したことを思えば、中国の楽曲と軽業師への言及も、まあ適切であろう（E.158）。中国の芸術への注目と賞讃は、ムーアの詩にはしばしば見られるのである（「おお 龍になること」、「九箇のネクタリン」など）。「青虫」なる奇妙な名前のポロ競技用の小馬を様々なものと比較し、譬えながら、その馬に呼び掛けたこの作品は、ムーアの根本主題である芸術論、詩論の範疇に、入るだろう。第1、5行、第3、7行が押韻する7行の3連と、第2、3行、第7、8行が押韻する最初の8行の1連、第6、7行が押韻する7行の1連、第1、6行が押韻する6行の1連に3行の1連から成る。ポロの動きを象徴する形態か。

Old Amusement Park 旧遊園地

ラガーディア空港⁽¹⁾ニナル前ノ

急げ、悩め、不用心な

訪問者は 決して変更しないのだ

その圧迫を 殆どコウモリの盲目になるまでは。

それ程恐しい苦境は起り得なかったろう

このめったにない所では——

そこで群衆が群がり集まるのは路面電車で

ガタガタと緑っぼい無限軌道装置を鳴らしている、

ボウリングのボールの雷鳴が

空気を震わせているようだ。公園の象が

ゆっくりと横になる、斜めに、

ビグミー
矮人の複製品がそれから乗り上がる

背が提供する小山に。

漆黒の柔毛で覆われた小馬が座り

込む 犬のように、無邪気な様子で——

何ら芸当も見せず——そこではそれが最上の行為なのだ。

それは全く決して止ることなく

昇り続ける大観覧車のようで、

杭垣で囲われた小馬乗り（代金十セント）のようだ。

係りの、小馬の下見所バドックの少年が、

持ち場の乗馬遊具に旋錠する——

旗がはためき、運賃が集められ、

射的場は顧みられなくなって——

半ば職務中で、半ば隠退状態で、

杭にしなやかに前屈みになって、

彼は友人に 最もどうでもいいことを告げるのだ。

それは手っ取り早い元の公園で、

飼い馴らされた野生の回転木馬のようだ——

活気づかせる頂点なのだ

勝利が反映する時は
そして混乱なのだ、遡及する時は。

—*The New Yorker* 40, (August 29, 1964) 34.

[自注] ブレンダン・ジル (Brendan Gill) からもらった空港当局の写真。

訳注 (1) La Guardia Airport. アメリカの New York 市の国際空港の一つ。New York 市長 (1934-45) を務めた法律家・政治家 (共和党・連合党) の Fiorello H. La Guardia (1882-1947) の名前より。

この詩以後は、エンゲルの著書公刊後の作品なので彼の解題はないが、「ニューヨーカー」誌の編集者から贈られた写真に触発されての作品で、ムーアの後期の1/3強の詩はこういうアメリカの場面が背景にされる (Ho. 158)。各連共、第1, 2行と第4, 5行が、一箇所以外は正確に押韻する。

In Lieu of the Lyre 七弦琴の代わりに

ハーバードの入学簿から除かれた人は
塔を幾つも見、旧構内を案内されたかも知れない——
ブフレ夫人の優れた押韻に活気づけられて、
<熱烈に感じる>① 火でもって。そう、情熱込めて。
押韻する散文も言葉の魔術師アキリーズによって復活された——
ファンク博士

『ハーバード・アドヴォケイト』誌の選出した公式非公式の
ハーバードへの招待は感謝させたのだ、ブルックリンの(あるいはメキシコの)
<無名の人々を⁽¹⁾>——

その「フランス風の特徴」をレヴィン教授⁽²⁾に発明して
もらった人、

特に余りにも忌憚なく憤慨して陳腐な常套句から避難した者は
補償を申し出られたのだ
ロウエルハウス出版局⁽³⁾ から——

というより、ヴァーモント・スティナワー出版局から。(不用意ならざる声明が
カーランドハウスに、少なくとも事実を引用する際の不正確さに対して)。

その『アドヴォケイト』誌へ、＜感謝します＞^④

私は実際 避け難いまでにぎごちない、言葉の巡礼者で
トマス・ビューイックのようだ、彼は帽子の縁から飲むのだ、
滝からこぼれ落ちる雫を、後に彼によって命名されたのだった
水晶のようなバンドゥシアの泉⁽²⁾の奇跡だと。

客には思い浮かぶのだ——もしも誰かが丁度よい時に告白したなら——
あなたが選んでしまったのかも知れないと、滝の方を、巡礼と帽子の縁の方を
次のような貴重な金言を

「休息している力が休息しているのは 何か他の力によって均り合いを保たれ
ているから」、

とか「懸垂線と三角形が合同して経間をしかるべく保つ」

(橋の)^⑤、

とか、余りにもしばしば忘れられている間違いなく当を得た事だが、ロウブリ
ング鋼索は
ジョン・A. ロウブリング⁽³⁾が発明したのだということ。

こういう感想を、デイヴィス氏よ、
七弦琴の代わりに。

——*The Harvard Advocate*, 100 (November 1965), 5.

[自注] *Advocate* 誌の編集長 Stuart Davis から詩の寄稿を求められたのに
応えて書いたもの。

① Sentir avec ardeur. “Tom Fool at Jamaica” の自注^③参照。

② Harry Levin [1912- . ハーバード大学英文学・比較文学教授——訳注]
の論文「彼女のフランス風の特徴についての覚え書」に言及。T. Tambimuttu
編『マリアン・ムーアの七十七歳の誕生日のための記念論文集』(1964) p. 40.
に収録。[従って、「発明してもらった人」とはムーア自身を指す。なお、ムー
アはブルックリンに居住していたので「無名の人々」の中に自分自身も含めて
いる。彼女の謙遜を示す——訳注]

③ a Lowell House *separatum* [別冊特別号]: *Occasionem Cognosce* 『時
宜を弁えよ』(1963)への言及。

④ gratia sum. Thomas Bewick [1753-1828. 英国の木版画家。鳥獣・田

園風景で有名——訳注]の尾部付加物「岩の上に彫られた心臓によって強調されている、岩からの水のしずく」p. 53. 『トマス・ビューイック自身による回想録』 *Memoir of Thomas Bewick Written by Himself* (Centaur Classics)

⑤ アラン・トラクテンバーク著『ブルックリン橋——事実と象徴』(1965) Alan Trachtenberg, *Brooklyn Bridge: Fact and Symbol*.

訳注 (1) ineditos. スペイン語の形容詞(未刊の、未発表の、世に知られていない)が名詞化され複数形で使われている。

(2) Fons Bandusian. ホラティウスの生地ウェヌシア (Venusia) 近くの心地よい泉。Horatius, *Carmina* (歌章) 第3巻13は, "O fons Bandusiae splendidior vitro/ dulci digne mero non sine floribus", 「おお, バンドゥシアの泉, ガラスよりも輝き, 甘美な葡萄と花々に相応しきものよ」と歌い出されている。

(3) John Augustus Roebling (1806-69). ドイツ生れのアメリカの土木技師。New York 市のブリックリン橋の立案者 (1869)。

「公園で」と共に Boston を扱った詩で, ムーアの芸術観, 特に詩についての考えを表明している, とホウリーは言う (Ho. 169)。「言葉の巡礼者」としての詩人は, 更に大きな流れからの, 「公園で」の中では「陳腐な人々の言葉瀑布」と呼ぶものからの, 「雫」を飲む (Ho. 170) のである。平凡な言葉の滝からの雫を飲んで特別に新鮮な優れた言葉を紡ぎ出すのが詩人に他ならない。

「七弦琴」は, 古代の詩の読者の伴奏をするのに使われた弦楽器で, ムーアが慎重に避けた, 伝統に適った韻律と通常の音楽の歌を, 示唆する (Ho. 170) とすれば, この詩は並の, ありふれた作品の代わりの＜独得の＞詩なのだという自負になるだろう。作品を依頼してくれた編集者に感謝して彼を讃えるのに, ブルックリン橋の立案者を持ち出した, ムーアの常の凝った詩作である。殆どの研究者に無視されている作品だ。真中の五行連は第1～4行が押韻する他, 第一連は第1, 2行が, 第二連は第7, 8行が押韻する。

The Mind, Intractable Thing 心, 扱い難いものは

胸に一物あってさえ, 時々他人を援ける。何故 私を援けてくれないのか?

おお イマニフィコ⁽¹⁾よ、
 言葉を使う魔法使い——詩人では なかったのか
 アルフレード・パンツィーニ⁽²⁾がそなたを定義付けたように。
 そなたは丁度今 屈折させていたのではないか
 吾が眼の半ば閉ざした三枚画の上に
 峡谷の映像を 昂ぶりながら——
 「乾涸びた葉が落ちた時のアメリカヤマブドウの花^{づな}綵」は
 砂地の暗い脇道の上に、葉が一枚漂っている
 細っそりした小枝の柿の木から、再び、

小鳥が一羽——<アリゾナ>⁽³⁾は
 追いつかれて、カッコウは二時間の
 追跡の後も擱えられず、ジグザグに動く
 ミチバシリ⁽⁴⁾は、一面に黒い
 縞模様でステンシルで刷り出されて、尾は
 風車のように回転させて私に挑むのか？
 そなたは恐怖を理解し、扱い方を知っているのだ
 鬱積した感情の、歌謡の、魔術の扱いを。
 私はそうはいかない。おおゼウスよ それに おお運命の神よ！

なされたことを恐れず
 明らかな敗北に阻止されず
 そなた、イマニフィコは 見くびる者を
 死を、意気消沈を、恐れず、
 ゼノールの人魚^①を誘惑^{おほおほ}して
 言葉の技芸をたまらなく愛^{いと}しいものにしたのだ、
 砂礁、難破船、惑える苦者、及び「海に沈んでいる鐘」——
 我らが所有しているのに近いものを王国に——
 私が扱い方を知らない技芸を。

——*The New Yorker*, 41 (November 27, 1965), 60.

[自注] ① The Mermaid of Zennor. ヴァーノン・ウォトキンズ著『気の合う人々』の中の「ゼノールの人魚の歌謡」を参照。“The Ballad of the Mer-

maid of Zennor” in *Affinities*, by Vernon Watkins (New York: New Directions, 1962).

訳注 (1) *imaginifico*. イタリア語, スペイン語, ポルトガル語には, “*imaginifico*” (イメージを作る, 想像をたくましくする), “*magnifico*” (壮麗な, 盛大な, 立派な, 素晴らしい), “*immaginifico*” (想像力の賜物に恵まれた詩人や芸術家について, 豊かな, 尽きせぬ) という形容詞はあるが, 他の言語にも筆者の知る限り作中のままの綴りの語は見当らない。これらの語を総合した掛け言葉として, 「壮麗で豊かな想像をたくましくして心象を作り出す尽きせぬ能力を備えたもの」という意味を籠めて, ムーアが造語したものか。言葉を操る魔法使いとして擬人化されて呼び掛けられている。

(2) Alfredo Panzini. (1865-1939) イタリアの作家。Dizionario moderno delle parole che non si trovano nei dizionari comuni 『巷の辞書には未掲載語彙を収録した現代語辞書』なる1000ページに及ぶ〈辞書〉を公刊している。生きた言葉を収集した。

(3) Arizona. 「小さな泉」の意の Papago Indian の語に由来するとされる語。小鳥にムーアが付けた名前か？

エンゲルに次いで最も早い時期に, ムーアの全体像を論究したドナルド・ホルの解説を見ておきたい。彼はこの作品を, 「非常に美しいと思う」「深みのある」詩 (Hall. 176) だと言う。“*image*” (心象), “*imagination*” (想像力), “*magic*” (魔術) の共通の語根に思いを致しながら「言葉の魔法使い」イマニフィコを讃え, その力が徐々に減少するのをまず嘆く (Hall. 179)。合理精神では十分扱えない鬱積した感情, 歌謡, 魔術は, 魔法の想像力で表現され得るのであり, イマニフィコにはその力がある。ところが「私はそうはいかない」のだ。そこで精神力の保持者として, 異教の抽象による神格をムーアは喚起する。イマニフィコは強くて, 敗北を, 「見くびる者, 死, 意気消沈させるもの」を恐れない。想像力は, かくして, こういうムーアが恐れていると見えるものに対する一種の盾になる。それは, 恐怖が募る不合理な所にまでやって来て, ムーアの合理精神では扱い切れないものを処理できるのだ。想像力の有するこういう力が「言葉の技芸をたまらなく愛しいものにした」のだ。次行の「砂礁」以下の, 「墓」(1921年7月発表の詩) の中の最後から二行目の一語を使えば「落されたもの」——無意識・無意志のうちに海底で振れ回っている——は, 心の底面にある恐怖, 鋭い痛みで耐え難い記憶, 心を掻き乱される余り認めるわけ

にはいかない感情，なのだ。想像力は，漂流物の中の王国なのだ，というのも，想像力というのは恐れることがなく，また実際，漂流物によって育まれるのだから（Hall. 179）。

最後の「私が扱い方を知らない技芸（＝言葉の技芸）」は，ムーアの常の内気とみえるかも知れないが，もっと字義どおりに彼女は，想像力がなくて詩が書けないと感じているのだと思われる。ムーアは常に想像力を崇拜してきたのであり，その必須の役割について多くの詩に書き続けてきたが，これ程に自分にとって想像力が深い意味を持つことを表明したことはなかった。想像力こそ彼女の鎧であり，そう考えるとこの作品は注目に値する素晴らしい詩だ（Hall. 180）。ホールの見解に賛成したい。

*

以上17篇の詩の邦訳で，実は，マリアン・ムーアの『完全詩集』（CP）に収録されている125篇の詩作品の，筆者による日本語訳は，完了した。以下にその発表場所と時期を整頓しておきたい。

The Complete Poems of Marianne Moore 『完全詩集』

目 次

I. COLLECTED POEMS (1951)

SELECTED POEMS (1935)

The Steeple-Jack 「尖塔職人」	紀・25
The Hero 「英雄」	紀・25
The Jerboa 「トビネズミ」	紀・34
Camellia Sabina 「サビーニ椿」	紀・34
No Swan So Fine 「そんなに見事な白鳥はない」	紀・34
The Plumet Basilisk 「セビレトカゲ」	紀・34
The Frigate Pelican 「軍艦ペリカン」	紀・34
The Buffalo 「バッファロウ」	紀・34
Nine Nectarines 「九箇のネクタリン」	紀・34
To a Prize Bird 「賞品として得た鳥へ」	紀・24
The Fish 「魚」	紀・27
In This Age of Hard Trying, Nonchalance Is Good and 「この辛い試練の時代には無頓着は結構なことだし」	紀・34
To Statecraft Embalmed 「香気で満たされた政治術へ」	紀・24

Poetry 「詩」	ALT・4
Pedantic Literalist 「銜学直解主義者」	E・65
Critics and Connoisseurs 「批評家と鑑定家」	E・4
The Monkeys 「猿たち」	紀・34
In the Days of Prismatic Color 「プリズム分光色の時代に」	E・66
Peter 「ピーター」	E・63
Picking and Choosing 「選り好みと選択」	E・4
England 「英国」	紀・25
When I Buy Pictures 「私が絵を買う時」	評・11
A Grave 「墓」	E・45
Those Various Scalpels 「あの様々な外科用メス」	E・45
The Labors of Hercules 「ヘラクレスの難業」	E・44
New York 「ニューヨーク」	E・55
People's Surroundings 「人々の環境」	紀・34
Snakes, Mongooses, Snake-Charmers, and the Like 「蛇, マングース, 蛇使い, その他」	紀・34
Bowls 「木球競技」	紀・34
Novices 「新参者たち」	紀・34
Marriage 「結婚」	紀・22, 23
An Octopus 「蛸」	紀・35
Sea Unicorns and Land Unicorns 「海のイッカクと陸の一角獣」	紀・25
The Monkey Puzzle 「チリマツ」	紀・34
Injudicious Gardening 「思慮に欠ける園芸」	紀・24
To Military Progress 「軍隊の行進に」	紀・24
An Egyptian Pulled Glass Bottle in the Shape of a Fish 「或るエジプト人がガラス壺を魚の形に引き伸ばした」	E・58
To a Steam Roller 「蒸気ローラーに」	E・56
To a Snail 「蝸牛へ」	E・4
“Nothing Will Cure the Sick Lion but to Eat an Ape” 「『猿を食べる以外病める獅子は癒せまい』	紀・24
To the Peacock of France 「フランスの雄孔雀に」	E・56
The Past Is the Present 「過去は現在」	紀・24
“He Wrote the History Book” 「『彼は歴史書を書いた』」	紀・24

Sojourn in the Whale 「鯨の中の滞在」	紀・24
Silence 「沈黙」	E・93

WHAT ARE YEARS (1941)

What Are Years? 「年月とは何か」	紀・24
Rigorists 「厳格主義者」	紀・24
Light Is Speech 「光は話し言葉」	紀・24
He "Digesteth Harde Yron" 「彼は『鋼鉄を消化する』」	紀・24
The Student 「研究者」	紀・24
Smooth Gnarled Crape Myrtle 「滑らかな瘤だらけのサルスベリ」	紀・24
Bird-Witted 「鳥の智慧の」	紀・24
Virginia Britannia 「ヴァージニア・ブリタニア」	紀・25
Spenser's Ireland 「スペンサーのアイランド」	紀・24
Four Quartz Crystal Clocks 「四箇の水晶時計」	紀・25
The Pangolin 「センザンコウ」	紀・11
The Paper Nautilus 「アオイガイ」	ALT・2

NEVERTHELESS (1944)

Nevertheless 「にも拘らず」	紀・33
The Wood-Weasel 「森イタチ」	紀・33
Elephants 「象」	紀・33
A Carriage from Sweden 「スウェーデンからの四輪馬車」	紀・33
The Mind Is an Enchanting Thing 「心は魅惑するもの」	紀・24
In Distrust of Merits 「真価を疑って」	評・11

COLLECTED LATER (1951)

A Face 「顔」	E・61
By Disposition of Angels 「諸天使の意向によって」	E・61
The Icosasphere 「二十球面」	紀・37
His Shield 「彼の盾」	紀・37
"Keeping Their World Large" 「彼らの世界を大きく保ちながら」	紀・37
Efforts of Affection 「愛情の労苦」	ALT・2
Voracities and Verities Sometimes Are Interacting	

- 「大食と真理は時に影響し合う」 E・46
 Propriety 「適正」 E・46
 Armor's Undermining Modesty 「鎧の、基礎を揺るがす慎しさ」 E・46

II. LATER POEMS

LIKE A BULWARK (1956)

- Like a Bulwark 「砦のように」 評・11
 Apparition of Splendor 「壮麗な幻影」 紀・25
 Then the Ermine 「それではオコジョは」 紀・37
 Tom Fool at Jamaica 「ジャマイカのトム・フール」 紀・37
 The Web One Weaves of Italy 「人がイタリヤから織り上げる織物」 E・96
 The Staff of Aesculapius 「アスクレピオスの杖」 E・44
 The Sycamore 「アメリカスズカケノキ」 E・43
 Rosemary 「ローズマリー (マンネンロウ)」 E・43
 Style 「様式」 紀・25
 Logic and "The Magic Flute" 「論理と『魔笛』」 紀・25
 Blessed Is the Man 「幸いなるかなその人は」 紀・37

O TO BE A DRAGON (1959)

- O to Be a Dragon 「おお龍になること」 E・44
 I May, I Might, I Must
 「私は かも知れない、もしかしたら、に違いない」 E・61
 To a Chameleon 「カメレオンに」 E・56
 A Jelly-Fish 「^{くらげ}水母」 E・42
 Values in Use 「使われている価値」 E・42
 Hometown Piece for Messrs. Alston and Reese
 「アルストンとリーズ両氏のための地元作品」 紀・36
 Enough: Jamestown, 1607-1957
 「十分: ジェイムズタウン 1607-1957」 紀・25
 Melchior Vulpus 「メルキオール・ヴルピウス」 紀・24
 No Better Than a "Withered Daffodil" 「『凋んだ水仙』と同然」 E・95
 In the Public Garden 「公園で」 紀・37
 The Arctic Ox (or Goat) 「北極牡牛 (もしくは山羊)」 紀・37

Saint Nicholas 「聖ニコラス様」	紀・37
For February 14th 「二月十四日のために」	E・52
Combat Cultural 「文化の闘争」	紀・37
Leonardo da Vinci's 「レオナルド・ダ・ヴィンチの」	紀・25

TELL ME, TELL ME (1966)

Granite and Steel 「大理石と鋼鉄」	紀・25
In Lieu of the Lyre 「七弦琴の代わりに」	紀・37
The Mind, Intractable Thing 「心、扱い難いものは」	紀・37
Dream 「夢」	E・70
Old Amusement Park 「旧遊園地」	紀・37
An Expedient—Leonardo da Vinci's—and a Query 「工夫—レオナルド・ダ・ヴィンチの一と疑問」	紀・25
W. S. Landor 「W. S. ランダー」	E・93
To a Giraffe 「麒麟へ」	紀・24
Charity Overcoming Envy 「嫉妬に打ち勝つ慈愛」	E・47
Blue Bug 「青虫」	紀・37
Arthur Mitchell 「アーサー・ミッチェル」	E・95
Baseball and Writing 「野球と書くこと」	紀・36
To Victor Hugo of My Crow Pluto 「私の鳥プルートについてのヴィクトル・ユゴーへ」	紀・24
Rescue with Yul Brynner 「ユル・ブリンナーと一緒の救助」	紀・37
Carnegie Hall: Rescued 「カーネギーホール：救済さる」	紀・37
Tell Me, Tell Me 「教えて、教えて」	紀・37
Saint Valentine 「聖ヴァレンタインよ」	E・52
Sun 「太陽」	紀・24

HITHERTO UNCOLLECTED

“Avec Ardeur” 「『熱心に』」	紀・24
Love in America —— 「アメリカに於ける愛」	E・59
Tippoo's Tiger 「ティップーの虎」	E・59
The Camperdown Elm 「キャンパーダウン榆」	E・58
Mercifully 「慈悲深く」	E・57

“Reminiscent of a Wave at the Curl”

『『巻き毛の波を思い出させて』』	E・57
Enough : 1969 「充分 : 1969」	E・57
The Magician's Retreat 「手品師の隠れ家」	E・47
Prevalent at One Time 「かつては流行った」	E・57

発表誌・号数・(発行年月)の詳細

紀 = 「文藝言語研究 文藝篇」(筑波大学文芸・言語学系紀要)

11号 (1987・1), 22号 (1992・9), 23号 (1993・3), 24号 (1993・8),
25号 (1994・3), 27号 (1995・3), 33号 (1998・3), 34号 (1998・10),
35号 (1999・3), 36号 (1999・10), 37号 (2000・3) 一本号

ALT=*American Literature Tsukuba* (筑波大学大学院・アメリカ文学研究会) No. 2 (1987・1), No. 4 (1990・5).

E = 「楡」ELM (「楡」短歌会, 隔月刊)

4号 (1984・3), 42号 (1990・5), 43号 (1990・7), 44号 (1990・1),
45号 (1990・11), 46号 (1991・1), 47号 (1991・3), 52号 (1992・1),
55号 (1992・7), 56号 (1992・9), 57号 (1992・11), 58号 (1993・1),
59号 (1993・3), 61号 (1993・5), 63号 (1993・7), 65号 (1993・9),
66号 (1993・11), 70号 (1994・7), 91号 (1998・1), 93号 (1998・5),
95号 (1998・9), 96号 (1998・11).

評 = 「アメリカ文学評論」(筑波大学アメリカ文学会) 第11号 (1990・7).

*

およそ16年間に亙って、筆者は、折りふし断続しながら、ムーアの詩の邦訳を従来の読解の吟味と共に試みてきたことになる。先行研究・読解への言及の密度は、その時々例えば許される紙幅などの事情で精粗の差があるが、本稿はさしずめその最粗の部に属する。最初期にムーアの全体像把握に務めたバーナード・エンゲルと、彼が扱った以降の作品については دونالد・ホールとに専ら言及を限って、ごく表面を基だ粗く一瞥するに留めたからである。邦訳の完了がまず当面の目標であった。

思うに筆者はその都度、ムーアという巨象を、ある時はその鼻のみに注目し、別の時にはその両耳を凝視し、またある時は分厚い腹部を、次には広い背中を、その次には太い前脚を、別の折には後脚を、次の機会には尾をと、それぞれ撫でさするような作業をしてきたようだ。あるいはムーアという大樹の、ある時

は根元の一帯のみを、別の時には木肌の状態を、陽の当る方に限ってとか、その反対側だけをとか、次には枝々の先のみを、その次には梢の有様を、という具合に、部分部分を見渡してきたとも言えよう。しかしそれらは全て、ムーアの全体像に繋がっていた筈である。

エリザベス・フィリップスが愛情を籠めて語るころでは、ムーアは、婦人が通常余り関心を持たないと思われる道具類、技術、機械装置、力学、軽業、野球、拳闘〔競馬やボロなどスポーツも〕などに深い興味を抱いた。書棚や小さな家具などは自分で造ったがパイを作ったことはなかった。兵隊精神、騎士道ぶり、修道院生活を讃えた。「料理や裁縫は時間を取られて自分が墮落した感じがする」と言ったが、肉と卵と野菜は料理した〔ここで筆者は思わず笑った。料理の〈仕方〉にもよるが、肉、卵、野菜を食べられるように料理するのは子供でも出来る〕。The New York Times と Bible を毎日必ず読み、百科事典、新刊詩集、科学読み物、その他空想を掻き立てるものは何でも読みまくった〔驚嘆すべき博読・博識ぶりをその詩作に反映した〕。コーヒーとアルコールは嗜まなかったが、もしウイスキーを飲むとしたら生のままにするだろうと言った〔賛成！〕。活力増進のために人参ジュースを勧め、果物と、石で碾いた全粒小麦粉のパンを愛用した (Ph. 2)。

そういうムーアは、鋭敏なアンテナを周囲に張り巡らせて、古今東西に及ぶ広範囲から良質の素材を見付け出してはそれらを独得に調理して新鮮な料理に仕上げ続けた。独自の眼と耳による、対象の微細入念な観察を基に、特異で奇抜な発想、着想から連想による連想を繰り展げ飛躍につぐ飛躍を見せながら詩作した。それらは、天空を自在に駆け巡りながら、しかも地上を舐めるように這い回った成果の形象化と言ってよいだろう。奇想を凝らし、韻律の技巧を練りに練った鏤骨彫心の125篇は、公刊した189篇の詩作品の66%強であり、John Ashbery ではないが「もっと完全な詩集」"More Complete Poems" を我々は待望したい (Mo. 443) が、とにかく、「完全詩集」と銘打たれている125篇の邦訳はここに完了した。

一篇の作品の中に、引喩、引用をびっしり詰め込んで調理されている詩の味読には、読者にもその引用・引喩に対する単なる知識以上のものが要請されている。その要求が果されない限りその作品そのものが読者にとって完成されたものとは言い難いという意味でムーアの作品は「未完の完成作」であり、ムーアは、小説家フォークナー (William Faulkner, 1897-1962) の詩人版とも言えるだろう⁵。没後28年経て、ムーアの詩の新鮮さは些かも色褪せないばかり

か増々輝き出している感がするが、その秘密の重要な一端はそこにありそうである。

注

筆者が従来参照し続けた引用・言及書（本稿では敢えて触れなかったものも全て含む）は以下のように略記し、そのページ表示を括弧内に数字で示す。

- CP. *The Complete Poems of Marianne Moore* (New York: The Macmillan Co. / The Viking Press, 1981)
- A 1. Craig S. Abbott, *Marianne MOORE: A reference guide* (Boston: G. K. Hall & Co. 1978)
- A 2. Craig S. Abbott, *Marianne Moore: A Descriptive Bibliography* (Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 1977)
- B. Harold Bloom, ed., *Marianne Moore* (New York, New Haven, Philadelphia: Chelsea House Publishers, 1987)
- C. Bonnie Costello, *Marianne Moore: Imaginary Possessions* (Cambridge: Harvard University Press, 1981)
- E. Bernard F. Engel, *Marianne Moore* (New York: Twayne Publishers, Inc., 1964)
- G. Robert Giroux, ed., *Elizabeth Bishop: One Art* (New York: Farrar, Straus and Giroux, 1994)
- H. Pamela White Hadas, *Marianne Moore: Part of Affection* (Syracuse: Syracuse University Press, 1977)
- Hall. Donald Hall, *Marianne Moore: The Cage and the Animal* (New York: Pegasus, 1970)
- Ho. Margaret Holley, *The Poetry of Marianne Moore: A Study in Voice and Value* (Cambridge University Press, 1987)
- L. Linda Leavell, *Marianne Moore and the Visual Arts: Prismatic Color* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1995)
- M. Taffy Martin, *Marianne Moore: Subversive Modernist* (Austin: University of Texas Press, 1986)
- Mer. Jeredith Merrin, *An Enabling Humility: Marianne Moore, Elizabeth Bishop and the Use of Tradition* (New Brunswick: Rutgers University Press, 1990)
- Mil. Christance Miller, *Marianne Moore: Questions of Authority* (Cambridge: Harvard University Press, 1995)
- Mo. Charles Molesworth, *Marianne Moore: A Literary Life* (New York: Atheneum, 1990)
- P. Joseph Parisi, ed., *Marianne Moore: The Art of a Modernist* (Ann Arbor: UMI Research Press, 1990)
- Ph. Elizabeth Phillips, *Marianne Moore* (New York: Frederick Unger Pub-

- lishing Co, 1982)
- S. Grace Schulman, *Marianne Moore: The Poetry of Engagement* (Urbana & Chicago: University of Illinois Press, 1986)
- Sch. Robin G. Schulze, *The Web of Friendship: Marianne Moore and Wallace Stevens* (Ann Arbor: The University of Michigan Press, 1995)
- Sl. John M. Slatin, *The Savage's Romance: The Poetry of Marianne Moore* (University Park and London: The Pennsylvania State University Press, 1986)
- St. Laurence Stapleton, *Marianne Moore: The Poet's Advance* (Princeton: Princeton University Press, 1978)
- W. A. Kingsley Weatherhead, *The Edge of the Image: Marianne Moore, William Carlos Williams, and Some Other Poets* (Seattle and London: University of Washington Press, 1967)
- Wi. I. Patricia C. Willis, ed. & Intro., *Marianne Moore: Woman and Poet* (Orono: University of Maine, 1990)
- Wi. II. Patricia C. Willis, ed. & Intro., *The Complete Prose of Marianne Moore* (New York: Viking, 1989)

1. 上記 Ho. 195-202.
2. 上記 CP.
3. 拙稿「涙は蜜蜂の針——エリザベス・ビショップの「人蛾」」(*Otsuka Review*, No. 30. 1994・6) pp. 72-83 参照。
4. 拙稿「野球と書くことと——マリアン・ムーア小考」(本誌 No. 36, 1999・10) p. 73 参照。
5. 拙稿「未完の三角形——フォークナーへの一つのアプローチ」(「アメリカ文学」No. 4. 1965・7) pp. 20-28 他のフォークナーに関する拙論参照。
尚、ラテン語その他について、同僚の秋山学氏から色々と御教示いただいた。

Summary

Marianne Moore published 189 pieces of verse in her lifetime, out of which 125 pieces were collected in *The Complete Poems of Marianne Moore*. This paper presents my Japanese translation of 17 poems of Moore, by which all the poems in the above collection have been translated into Japanese by the present writer. The list of all the publications including those translations is added to the paper. Besides a very sharp and insightful observer, Moore matchlessly read extensively for material for her poems. Dealing with the observations and materials, she prepared us a unique and original meal with a skill all her own, through striking ideas and conceptions, free and wild association and association. Her poems, are, as it were, made by the flying horse Pegasus sweeping over the earth.